

佐久考古通信

No. 31
1984, 8, 15
佐久考古学会

昭和59年度総会報告	1
昭和59・60年度佐久考古学会役員の紹介	2
奈良埋蔵文化財センター「中近世遺跡調査過程」の研修に参加して(森泉かよ子)	3
愛知紀行 たった一日の旅 (小山 岳夫)	4
調査東報(佐久市・小諸市・御代田町)	5
事務局からのお知らせ	6
後記	6

昭和59年度総会報告

去る6月9日、佐久市岩村田浅間会館に於て昭和59年度の総会及び講演会が開かれました。会長挨拶の後、林会員を議長に選出し議事を行いました。第1号～3号機案までの討論を行ない、原案通り賛成されました。58年度会務報告の中で、黒岩南会長より矢出川遺跡の保存対策についての詳細な経過報告及び花岡会員より研究報告書第1集についての経過報告がなされました。さらに第4号・5号機案は、別記のように、会務のスムーズで内身の盡い運営をめざして役割を分担すべく選任されました。

その他、福島会員より県考古学会の現在の状況として、対文化課との関係について、文化財行政の指導的立場にありながら、中央道の盛土保存問題、市町村に対する姿勢、埋文センター

のかかる問題など一連の軟弱で低劣な態度に、県考古学会としても断じて許し難いとして、抗議の要望書を提出する決議がなされている旨の報告があった。

講事終了後、岡谷市教育委員会の高林重水氏により、「橋原遺跡の調査報告 発生式土器を中心とした」の講演がスライドを中心に進行された。日頃ほとんど接しられない岡谷地方の遺構と遺物を多量のスライドで見られたいへん有意義でした。今度は実際に岡谷へ出かけて佐久と岡谷の土器を結ぶ親縁性を実見しようと思いを改めさせられた会員も多くあったようです。

その後、近くのホテルにて懇親会が行なわれ、会員相互の交流を深めました。

(文責 林 幸彦)

昭和 59・60 年度佐久考古学会役員の紹介

◎ 会長 由井 茂也

◎ 副会長 黒岩 忠男・白倉 盛男

◎ 事務局長 木内 挑

幹事 井出 正義・林 幸彦・福島 邦男・高村 博文・島田 恵子

花岡 弘・森泉 かよ子・小山 岳夫・堤 隆

◆ 球審 衛 高村 博文・林 幸彦

◆ 会計 島田 恵子

◆ 書記 花岡 弘・小山 岳夫・堤 隆

◆ 通信誌集 井出 正義(編集長) 高村 博文・福島 邦男

森泉 かよ子・小山 岳夫・堤 隆

◆ 見学旅行 林 幸彦・福島 邦男・花筒 弘

◆ 地区委員

I 地区(稲井沢町・御代田町・小諸市)

尾台 卓一・薄辺 重義

II 地区(北御牧村・浅科村・立科町・塩月町)

猪川 喜四郎

III 地区(佐久市)

森泉 定勝・井上 行雄・大井今朝太・佐藤 敏

IV 地区(田代町・佐久町・八千穂村・小海町)

三石 延雄

V 地区(北相木村・南相木村・南牧村・川上村)

由井 明・土居 忠芳

VI 地区(佐久地域外の地区)

白田 武正

◆ 会計監査委員 由井 明・井上 行雄

奈良埋蔵文化財センター「中近世遺跡調査過程」の研修に参加して

森泉 かよ子

研修は 6 月 12 日から約 10 日間にわたり、一日 2 テーマを設け、各先生方の講義をうかがった。テーマは遺構中心に展開され『集落』・『城址』・『墳墓』等々多岐に渡り、中近世遺跡の経営場というか入門端であり、全体像の把握に大いに役立つものであった。

中近世遺跡は、原始・古代に比して発掘調査例が少く体系的に整っておらず、これから調査例が増すことで、具体的な問題点の提示がなされるという段階といえるようだ。

今回は遺構中心ということで、遺物についてほとんど触れず、平安時代から室町時代にわたる各遺構例が示された。

(1) まず集落形態については、石川県寺家遺跡によると、平安時代後期ころより溝による分割がなされ、鎌倉時代にはその溝が広くなり壁を閉むのであるが、その屋敷内でも堀を作り有力者とそれに従う者とを分けて住む階層性がみられるようである。古墳時代より、用途に分かれた遺物の存在一例えば、倉、井戸等一があらわれてくるが、掘立柱建物址によりその機能分化がより読み、溝で区割された中に、主棟、倉(穀柱が多い)、井戸等が必ず備えられているようである。また、この屋敷地の一定の方角に墓を作っている例もある。

城下町の例として、飛騨国に越前一乗谷に居
きどうち (5) 無を構えた朝倉氏の城内での発掘調査例がある。

長い谷を北と南に土塁を設けて区切り、別館、

待機所・寺町・町屋を構成しているものである。

朝倉義景の居館は、東側谷中央の山城を跨りてきただところにあり、土塁をめぐらし、外側に堀を設けている。15棟の建物が検出され、主棟、倉庫、台所、馬廐、廻廊等、礎石を使用しており、他をもつ庭園も設けられている。

武家屋敷は町割がなされ、道筋を造りて、道筋に面して門を設け、間口の狭い奥行きの広い庭敷を土塁で囲っている。遺物は掘立柱建物址で、溝による仕切空間があり、井戸、および便所に使用されたであろう石組、また埋められた越前鏡のカメは財蔵に使用されたとしているものがセットでみられ、池はないが庭、茶室等も敷地内にある。これに対して、屋敷の区割を構・構・構のみで区割する小さな屋敷群があり、隣の屋敷と雨落ちの溝を共有する程に間口いつぱいに連てられ、石組 1(便所)、井戸 1、妻 1、を備えるものであり、下級武士の館ともさされている。これに特徴を遺物一箇・曲物等々を出土する小さな屋敷があることから駿河人の家であろうとされ、人家の集中した町屋の存在もあったようである。

このように、中世の遺構も発掘調査により再現されつつあるが、現在の集落と一致している場合が多く、京都・東京などの都市の調査は既に大変なものである事等もお話しにあった。

中近世の遺跡はもともと現在に近いのに多くかわらず、違い存在である現状を歓迎して、立

聖地御射山

佐々木 宗昭

藤ヶ峯の南麓、八ヶ島湿原の畔に御射山といふ地名がある。この一部に平坦な凹地部を三方からとりかこむ丘陵面の地形がある。ここが「御射山祭祀遺跡」がある。

△御射山とは諏訪大社下社（里宮）の奥社（山宮）の地名であり、古来より神聖視された場所であった。つまり中世にあっては、この場所において御射山祭と称する大神事が行なわれた。△この神事の本體は、いわゆる信仰に起因するものである。一つの靈が失なわれることにより、より新たかな靈が宿り、生まれるという考え方があり、それが五穀の豐饒への深い祈りとして春から秋にかけて、里での収穫が取り終る季節のふし目ふし目に斎行された。△此の御射山遺跡は、三方の丘陵面に階段状の遺構を構成している点が大きな等色とされ、過去三回にわたる発掘調査の結果、階段状遺構の地形は、ほぼ全体的に輪円形であり、その外郭は長径三七〇メートルに及び、内郭すなわち凹地部はやや三角形をなした平坦地で、底辺二〇〇メートル、高さ一三〇メートルの規模をもつ遺跡であることが判明した。そして此の階段は最高九メートルの幅をもち、高さも最高四メートルを測るものであり、三方の丘陵における階段の数は必ずしも同じでなく、高さも不規則なものであった。△此の遺跡のもう一つの特色としては、土師質土器を中心とする杯（はぬ）と皿の破片が多量に出土することであり、その数は約一万四千片以

上にも及び、完形品は九十七個である。そして、その大半が手づくね製のものであることも一つの等色とされよう。△この点について金井典美「諏訪信仰史」によると、多量の破片が出土するのに対し完形品が極めて少ないと「意図的に破棄」したのではないかと述べている。即ち、「土器わり」と称する風習があったという話は、しばしば聞かれるところであり、こうした行為により物の清淨、一回性を期したものであろう。現に伊勢神宮出雲大社にもこれに似た事が行なわれており、京都神護寺で行なわれる「かわらけ投」と称する厄除け祈願に付随する習わしもこれと同じ意味をもつものであろう。△昨年調査された藤村遺跡からは多数の住居址が検出され、そのほとんどが「カマド」を伴なっていた。しかし、中に意図的に焼いたと思われるものもあり、ある意味ではカマド（火）に関する信仰的行為によるもので、前述した「土器わり」、「かわらけ投」と同じ意味を含むものである。推考されよう。△又、現在神社において六月、十二月に執り行なわれる大祓式における「穢」、穢を祓う祭詞として「大祓詞」があるが、その祭詞文の中に『天ノ音曾ヲ太祓チ未尚切リテ今はとりさふとのりとごとの八針ニ取辟キテ天ツ祝詞ノ太祓詞奉ヲ宣レ』とあるが、これはその時の神事に用いた小さな弓矢、剣、鉤、白布等を折りくだき、或は引き裂くことを意味し、式の終了後に川に流すわけであるが、こうした事も、前述してきた習わしと同じ意味をもつ共通した信仰的基盤から成り立っていると考えてならないのである。

もかわらず、三人の目は一様に輝きを増して
いた。佐久平では曖昧であった歴史時代土器編
年の確立、それに伴う遺構の変遷過程の解明、

また、川越焼窯の再現等々、今回の旅は佐久の
歴史を考える上で大きな一步を踏みだしたもの
と信じている。 1984.7.9

調査速報

鉄筋屋造跡群鉄筋屋遺跡

小山 岳夫

佐久市小田井に所在する遺跡で、低湿地が樹
枝状に入り組んだ小台地上から、奈良～平安時
代の住居址 4 棟、竪穴状造構 6 基、溝状造構 2
基、土塙、ビット等 100 余基が検出された。

遺物は、土師器、須恵器、繩文土器、打製石
斧、馬骨片等があり、須恵器の占める割合が高
い。馬骨片は東南に位置する野火付遺跡でも多
量に検出されており、その有機的な関連性は遺
跡の性格を考える上で、注目に値する。

野馬久保遺跡 林 幸彦

本遺跡は、蛇坂 B 遺跡群の南西を占めている。
サンエス電気製作所工場新築に際して、緊急発
掘調査を 6 月 7 日～12 日の 6 日間実施した。
検出された遺構は、平安時代住居址 2 軒であり、
出土遺物は灰陶陶器・土師器・須恵器・鉄器が
ある。特に 2 号住の杯の出土量には目を見張ら
せるものがあり、個体の知れるもので約 70 個
以上を数える。さらに、南北 1m、東西 2m あ
まりのベッド状造構もこの時期としては特異で
ある。

大井城跡（黒岩城跡）

林 幸彦

鎌倉・室町時代に大井氏が居城とした平山城
で、石並城・王城・黒岩城をあわせて大井城と
よばれている。今回、県史跡解除となったのは、
黒岩城の南端である。8 月上旬現在調査対象地
の表土を除去したところであるが、房生時代～
鎌倉時代の間に長い時間にわたった遺物が出土
しており、城に関する遺構の他に住居址等も埋
蔵しているかのように思われる。

宮ノ反遺跡 花岡 弘

南場整備事業に伴う事前調査で、8 月 1 日現
在、7 棟の住居址（古墳時代後期後葉～平安時
代前葉）のほか、掘立柱建物址 3 棟、溝 1 基、
土塙 6 基が検出されている。

遺物には、土師器、須恵器、刀子、鉄製防錆
刷、釘、滑石製丸玉、土製丸玉などがある。

鉄筋屋造跡群野火付遺跡

堤 隆

野火付遺跡の調査は八月初旬をもってほぼ完
了の予定ですが、約 1 万平米にわたる調査区か
らは、奈良時代の住居址 7 軒、平安の住居址 8
軒の他、ひとつの区画を意味するよう路、井
戸址や、中世近世にわたる小堅穴状造構、住
穴群、掘立柱や、100 をゆうに越える土塙群が
発見されています。また、平安時代と考えられ
る葬廻馬の土塙墓 6 基のほか、人骨を埋葬した
土塙墓（土葬及び火葬墓）数基も検出されました。

事務局からのお知らせ

○ 矢出川遺跡群保存にむけての公開例会のお知らせ

8月11日(土)の矢出川遺跡保存対策特別小委員会で、矢出川遺跡群の重要性を地元の人々に理解していただくため、南牧村で何か催し物を行なおうと話し合われました。

そこで、佐久考古学会としてもこれに便乗して、公開例会的IC勢力を集中してとり組ことになりました。時期としては、10月下旬～11月初旬頃とはっきりしていませんが、内容の打合せを9月8日(土)第3回例会を利用して、佐久市埋文資料室で行ないます。多数参加して、素晴らしい催しものとなるよう努力しましょう。

○ 例会について

本年度の例会は、総会でも提案があったように「赤い土器を追う」をテーマに弥生時代の基礎講座を行なうことになりました。第1回7月14日は、花岡会員による弥生前期、第2回8月11日は、小山会員による弥生中期の講座が行なわれました。第3回9月8日は、林会員による弥生後期、第4回10月13日は、高村会員による總括(1)、第8回昭和60年2月9日は、白田会員による總括(2)を行なう予定です。ぜひ誇り合って例会に参加しましょう。

○ 佐久考古通信第3号までの合冊類本希望者の募集について

佐久考古通信は、昭和50年9月26日に第1号を発行以来、昭和59年6月5日発行で第30号になりました。これを一区切りに合冊し、また、第30号までの目次及び著者名索引を作成しました。合冊類本を希望する人は事務局に申し込んで下さい。尚、その際、自分で所有している通信を調べていただき、不足の号を書きとめて事務局に提出して下さい。

後記

夏はエネルギーを最大に使って活動する時期。それぞれの研究にとりくんでいることと思いま
すが、体には注意して頑張って下さい。本号から
編集を縦書きから横書きに改めました。発刊
から10年となり通じもしっかり根をはり始め
たように思われます。これからもみんなでます
ます大きな木に育てましょう。(H.T.)

佐久考古通信 第3号

発行所：佐久考古学会

長野県佐久市岩村田 1040-7

木内 捷方(TEL 385)

TEL 0267-8-0617

発行者：由井 茂也

編集者：由井正義(編集長) 高村 福島

森泉 小山 健

佐久考古通報

No.32

1984.12.1

佐久考古学会

旅行記 みちのくの多賀城をたづねて (林幸彦)	1
発掘に参加して (林泉定彦)	2
北西久保遺跡の石造塔婆群 (井上行雄)	2
野火付遺跡の一考察 (尾台卓一)	3
歴史学習で思うこと (臼田武正)	3
聖地御射山 (佐々木宗昭)	4
学会に入って (倉見渡)	5
縦文人のささやき (掛川喜四郎)	5
古代人の残科土合を想う (峯村今左太)	5
「報告」池の平遺跡発掘調査の概報 (池の平遺跡発掘調査団 中村由克)	5
後記	6

旅行記 みちのく多賀城跡をたづねて—前編—

林 幸彦

昭和59年10月2日早朝6時珍しく定刻に、バスは一路多賀城市をめざして佐久市役所を出発した。途中岩村田勢も加わり、由井会長以下総勢23名となる。参考までに運転手さんは、中沢泰明、小林安一の両氏で、420kmの旅定である。秋だけなわの蛭井沢高原も碓氷峠を越すと木立は一変してまだまだ青々としている。上州と佐久の気候の違いをさまざまとみせつけられる。九十九川と烏川の合流点あたりより北側東平野の広さがいやでも眼前に広がり、沿道のあちこちに巨大な前方後円墳が姿を現しあげる。この高崎市から伊勢崎・太田・足利市、

にかけては、人物・器材などの著名な埴輪が出土した塙坂古墳群や天神山古墳などが所狭しと並んでいる。

さて、快走してきたバスも自然の要求を満たすため桐生にて小休止をする。佐野インターから東北自動車道に入る。矢板I.C.を過ぎる頃には、前、後部座席に備えた気付け袋もビンの底にわずかとなり、皆の血色が良好となる。途中沿道の古代から中・近世に至る多くの歴史跡の井出先生と歩く地質学典の白倉先生のご説明も那須S.I.Pで昼食をとるために一時休止。昼食後、安達太良山を横目に泉I.C.まで無事到着する。

~~~~~  
発掘に参加して北西久保遺跡の  
石造塔婆群について

森泉 定勝

井上 行雄

以前から考古学に興味を持っていますが、『下前田城の古墳発掘に参加して見ないか』と勧められ、六十の手習とは思いましたが参加させて頂きました。

一日目には木を切ったり、草を刈ったりして終りました。二日目から先輩の皆さんから色々と教えて頂きました。一号古墳の石室内は盗掘されていて遺物は余りなく築造澳門も大分破壊されていました。前庭部から土師器、須恵器の破片が多数出土しました。

二号墳の前庭部から豪形土器、高杯など検出され、土師器片、須恵器なども多数出土しました。築造澳門もはっきり検出され、石室内は、鉄平削石及び河原石が散っていました。その上から切子玉、ガラス小玉(280個位)が発見され、また人骨3体分位が検出されました。緑番をたき、与良先生と井上さんと三人で般若心経を上げ回向しました。

それから上の城遺跡、西一里塚遺跡と次々と参加して、住居跡、その他の遺構などを検出し、それらを掘下げて完掘した時の感激・満足感は何物にもかえられません。また、多勢の皆さんとの交流もできました。

しかし、悲しいことは、専門の学校も出ておらず勉強も足らないので、自分で掘った遺跡の報告書を自分で書く事が出来ない事です。けれども自分は遺跡を発掘する事で満足しています。

北西久保石造塔婆群は、勞生時代より古墳～平安期までの大遺跡の堆中に所在している。

いまさだか 証はならぬ五輪塔

遠き祖先の大さざぞ知れ

これは元佐久市教育長浅沼<sup>封</sup>氏より贈られた短歌である。同塔婆群は昭和41年3月、果樹改植中偶然発見された。まず、宮下真澄により調査された後、第二次調査は昭和44年12月に佐久市教育委員会によって行われた。調査担当者は朝大倉出秀郎助教授、補助員には同大考古研の男・女学生数名があり、地元協力者10名と共に約十日間に亘り調査が行われた。五輪塔の前面より、現在の桃畠の南端に至るまでトレンチをいれ、地下1米余掘り下げた結果、勞生の住跡址や土塙墓等が確認された他、塔婆群は養蚕小屋の中程までのびていることが明らかとなった。だが、残念至極にも期日、予算等の関係上、調査は中断され、残る数カ所の遺構は調査未了のまま無残にも削平されてしまった。担当者は他村の調査も兼ねていたらしく、現場へ来てもすぐに出かけ、夕方遅く帰るという体たらくで、不在の日が多くなった。

発掘終了後降雨あり。翌日、新村薰氏が来訪し五輪塔前底より「慈寧元宝」等北宋錢四枚を表採された。この塔婆群の被葬者や塔の造立年代が不明なことは、浅沼氏の短歌によく表現されている。49年12月に佐久市旧跡として指定され、現在に至っている。

## 野火付遺跡の一考察

尾台 卓一

御代田町野火付遺跡の発掘調査に当り、団長を始め調査員各位の方々ならざるお骨折により多大なる成果を得て終了しました事に対し厚く御礼申しあげます。

野火付地帯は稍高台で小田井田園としては、地味粗薄にして、水便悪しく水喧嘩の絶えない所といわれ、すぐ隣接地の（佃田）は凹地で地味も底子水系も整い一等田地と称されていた。この佃田の名称は各郷村にあったと思われるが、現在御代田の佃田と板井の佃田として地名が残っている。佃田は莊園時代地頭が管理支配し年貢を上納していた。

京都の大徳寺は八条院領の年貢徵収を依頼され、佐久の地頭大井・伴野市に佃田の年貢不納をなじり納入の督促状が古文書に残されている。段々佃田は地頭の額有化甚しく地頭の自作地迄に波及し、近くの郷村住民に使役を強制したものと思われる。野火付もその一郷村ではなかつたかと思われる。

莊園時代一戸を一保と称し、一保は十人から二十四、五人位迄一保と称し、一保が五十保集って一郷と称した。

佐久は八郷あったので四百保、一保に二十八として人口は八千人位となる計算。

野火付と佃田の境に御影道があり道型も二メートル位あり、六角形の石燈籠が立ってあった。東山道に關係がありはしないかと思われる。

## 歴史学習で思うこと

日田 武正

小学校6年の社会科では、日本の歴史について学習することになっているが、機会あって子どもたちと学ぶ中から、いくつか示唆された点があるので述べてみたい。

子どもたちは知的欲求の高まる発達段階ということもあるが、歴史に対する興味関心には強いものがある。特に原始古代關係では、身近に見学調査できる遺跡や実際につれてくることのできる遺物など具体的な資料を通しての学習と火おこし、土器づくり、堅穴住居づくりなどの体験学習は実に意欲的である。

ところが、このような子どもたちを取り巻く学習環境はまことに不適だといわざるを得ない。子どもたちの住む地域には価値ある歴史事象が多くあるにもかかわらず、それらの素材が教材化されて学習展開された例はあまりにも少ない。たとえ教材化を試みても資料が整備されていかなかったり教諭の歴史認識の問題から素材を振り起こせなかったりして、とにかく、地元の貴重な歴史をほとんど生かすことができないのである。このような実状を考えると、学校教育や社会教育の領域はもちろんのこと、考古学研究の立場においても広い意味での教材化を見直した資料づくり（スライド・ビデオ・解説書・地図・年表など）や各種実験考古学教室の開催、遺物の効果的な展示公開などが必要に思われる。もっともっと考古学研究は教育事業に力を注いでいいのではないか。

## 聖地御射山

佐々木 宗昭

播磨の南端、八ツ島満原の畔に御射山といふ地名がある。この一部に平坦な凹地部を三方からとりかこむ丘陵面の地形がある。ここが「御射山祭祀遺跡」がある。

△御射山とは諏訪大社下社(里宮)の奥社(山宮)の地名であり、古来より神聖視された場所であった。つまり中世にあっては、この場所において御射山祭と称する大神事が行なわれた。△この神事の本懸は、いわけに元信仰に起因するものである。一つの靈が失なわれることにより、より新たかな靈が宿り、生まれるという考え方があり、それが五穀の豊饒への深い祈りとして春から秋にかけて、里での収穫が取り終る季節のふし目奉じ目に斎行された。△此の御射山遺跡は、三方の丘陵面に階段状の遺構を構築している点が大きな特徴とされ、過去三回にわたる発掘調査の結果、階段状遺構の地形は、階段全体的に圓錐形であり、その外郭は長径三七〇メートルに及び、内郭すなわち凹地部はやや三角形をなした平坦地で、底辺二〇〇メートル、高さ一三〇メートルの規模をもつ遺跡であることが証明した。そして此の階段は最高九メートルの軸をもち、高さも最大四メートルを測るものであり、三方の丘陵における階段の数は必ずしも同じでなく、高さも不規則なものであった。△此の遺跡のもう一つの特徴としては、土器質土器を中心とする杯(壺)と皿の破片が多量に出土することであり、その数は約一万四千片以

上にも及び、完形品は九十七個である。そして、その大半が手づくね製のものであることも一つの特色とされよう。△この点について金井典美「源訪信仰史」によると、多量の破片が出土するのに対し完形品が極めて少ないと「意図的に破壊」したのではないかと述べている。即ち、「土器わり」と称する風習があったという話は、しばしば聞かれるところであり、こうした行為により物の清浄、一回性を期したものであろう。現に伊勢神宮出雲大社にもこれに似た事が行なわれており、京都神護寺でも行なわれる「かわらけ投」と称する厄除け祈願に付随する習わしも此れと同じ意味をもつものであろう。△昨年調査された権村遺跡からは多数の住居址が検出され、そのほとんどが「カマド」を伴なっていた。しかし、中には意図的に築したと思われるものもあり、ある意味ではカマド(火)に関する信仰的行為によるもので、前述した「土器わり」、「かわらけ投」と同じ意味を含むものである。推考されよう。△又、現在神社において六月、十二月に執り行なわれる大祓式にかけ、籬を祓う祭詞として「大祓詞」があるが、そ<sup>すがせ</sup>の祭詞文の中に「天ツ官管ヲ本茹断チ末茹切りテ社<sup>そ</sup>り<sup>り</sup>さ<sup>り</sup>八針ニ取珠キテ天ツ祝詞ノ太祝詞ヲ宣レ」とあるが、此れはその時の神事に用いた小さな弓矢、劍、鉢、白布等を折りくだき、或は引き裂くことを意味し、式の終了後に川に流すわけであるが、こうした事も、前述してきた習わしと同じ意味をもつ共通した信仰的基盤から成り立っていると思えてならないのである。

## 学会に入つて

## 縄文人のさやき

倉見 慶

昭和55年の夏、豊月町の又久保遺跡発掘調査の作業に始めて参加しました。福島さんや調査員の方々の御指導、御教授を受けながら縄文式土器や石器、平安時代土器等。須恵器などの勉強を楽しく行なうことができました。また、町内外を問わず多くの方々と知り合いになったことも嬉しいことの一つです。

今年は、佐久考古学会に入会させていただき、新しい方々とふれ合いをもつことができました。さまざまな内容に取り組んでいるわけですが、できるだけ協力をし、先輩達の後から遅れない様について行きたいと思います。

## 古代の農耕付土合を想う

塙村 今左太

布施川が千曲川に流入する附近を字名土合といいます。この畠地帯には土器の破片が散在しています。又、古墳が数基あります。一号古墳からは円頭把頭の刀、鉢形鏡等出土しています。爪生根祭祀遺跡が発見されからは、古東山道の爪生根越えが標識されまして、土合が千曲川渡河地点だといわれます。

私は小さい頃から畠仕事のため西郷に迷入られてこの土合に来て、石器、土器に接して育ってきました。この土合の古き文化を、少しでも解したい。これが私の願いです。何とぞ御指導の程をお願いしてご挨拶とします。

横川 審四郎

私は昨年6月に、豊月町春日の竹之城原遺跡の発掘調査に初めて参加しました。

割り当てられたグリットを丁寧に掘下げていくうちに、黒色土中より1片の土器が出土し、私を興奮させました。それは、何千年も昔の人々がここで生活をし、この土器を使用していた明らかな証拠であります。そこからは、縄文人の生活の匂いやざわめきが伝わって来るような感動を覚えました。遙かな時の隔ではあっても、先達の先人が、身近な所で生活していたとわかると、なにやら縄文人の声が聞えてくるような不思議な気持ちになりました。

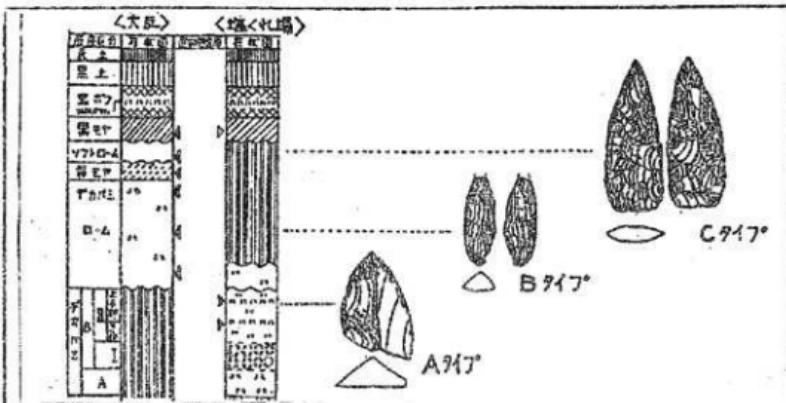
## 池の平遺跡

## 発掘調査の概報

池の平遺跡発掘調査班

8月2日から9日まで八千穀にて第2回池の平遺跡発掘がおこなわれました。調査には、八ヶ岳の奥いたちをしらべている八ヶ岳固体研究グループ（信州大学理学部地質学教室）と中商信、東北信、北関東、ひがし東京の野尻湖友の会、そして地元八千穀村との三者で調査団を結成し、小学校以下の約180人の参加者がおり、団長には出浦深教育長がありました。

発掘地点は、1971年の発掘地でもある塙ヶ瀬と昨年からの大反<sup>おおかたけ</sup>地点で、出土資料総数は3,533点で、尖頭器13点、スクレイバー3点を含むものの大半は黒曜石器の碎片、剝片で



した。発掘の成果は次のとおりです。

1) 遺物密集区(ユニット)が大反地点から2ヶ所、塩ヶ崎場から5ヶ所、存在が確認されました。

2) 遺物包含層(生活面)がデカバミ(砾石層、約13,000年前)から黒モヤ(約10,000年前)までの8層準にみとめられました。

3) 2次にわたる調査で出土した尖頭器は、片面加工で断面は三角形に近いAタイプ、両面加工で断面は厚く、加工が粗いBタイプ、両面加工で断面は凸レソメ形で加工が緻密なCタイプの3タイプに分類でき、層位的にA→B→Cの変遷がみとめられました。このような尖頭器の形態変化が一道路で層位的にとらえられた

例は、きわめて少なく重要な成果だといえます。

4) 大反A-20グリッドでは、尖頭器以外に使用された剝片、スクレイパー等が既のまわりにちらばって出土しました。この出土状況は、この地点が一時的な石器製作場だっただけでなく、キャンプ地等の生活の場であったことを推定させます。

<参考>第1回発掘の報告書が出版されました。八千穂村教育委員会までお申込み下さい。

(550円送料含)

文責 中村 由克(野尻湖博物館)

## 後記

本号は、日頃考えていることを多くの会員から貢献していただきました。一つのことにつき全員が参加をし、お互に発展しあう学会づくり、仲間づくりをしたいと思います。(E.P.)

発行所: 佐久考古学会

長野県佐久市岩村田 1040-7

木内 捷方(下 585)

TEL 026 78 0617

発行者: 由井 茂也

編集者: 井出正義(編集長) 高村・福島  
森泉・小山・堤

# 佐久考古通信

No. 33

1985. 3. 31

佐久考古学会

\*\*\*\*\*  
資料紹介付集  
\*\*\*\*\*

|                               |   |
|-------------------------------|---|
| 旅行記一みちのくの多賀城をたづねて —後編— (林 幸彦) | 1 |
| 矢出川遺跡採集の細石刃石核二例 (由牛茂也・堤 隆)    | 2 |
| 蓼科山北麓に於ける縄文中期初頭の様相 (福島邦男)     | 3 |
| 縄文土器を作る (岩村田高校社会班 小山栄二)       | 4 |
| 野辺山の鉄雞 (土屋忠芳)                 | 5 |
| 事務局からのお知らせ                    | 6 |
| 後記                            | 6 |

## 旅行記 みちのくの多賀城をたづねて —後編—

林 幸彦

泉ICから途中ほとんど迷いもせず(?)、午後2時30分に東北歴史資料館に到着する。名高い資料館にしては、やや小ぶりの感を受ける。ホールで小山君の旧知の人「オンビンニ、オンビンニ」の石川氏と対面する。資料館の概要是宮城美人の学芸員に丁寧に説明して頂く(内心は時間を感じながら)。展示品は文字が記されたもの(木簡やうるし塗の和紙)が多くみられ、また、須恵器なども優品があり、さすが東北の中心地である。多賀城に關係するもの以外では、知識不足のせいも多分にあるが、東北地方でも立派な埴輪や土師器があるのに驚いた。隣接して所在するかの有名な多賀城跡を突見し、いよいよ政府跡へと歩を進める。政府跡はけっこう小高い場所を占地し、やはり広大なス

ケールであった。ただ、土壘の復元方法にもう一工夫欲しいし、礫石をコンクリート漬けにするのはいただけないと感じた。

午後5時、宿舎に到着。夜は慣例により無礼講となり、「オンビンニ」の石川氏の独壇場となつた。2日目は運転手さんの好意により、朝まだきの五大堂と9時前半に創建された瑞巖寺を散策でき、善の気がかりなお土産を朝の魚市壇で確保できた。こうして楽しく、やや眠かった、みちのく紀行から全員無事に7時佐久市役所着となった。……さらに、この研修旅行で特記すべきは、夜半というより、早朝まで「ワソハツハ、ワソハツハ」と大貧民がくり返され、更に帰途の車中でも読いたことである。

## 矢出川遺跡採集の細石刃石核二例

由井 茂也・堤 隆

昭和28年春、矢出川遺跡での細石器の発見が契機となって、日本で初めて細石器文化といふものが確認された。そしてその細石器文化は、全国的に研究者の関心を集め、新しい研究の火となりたことは言うまでもない。

その矢出川の発見から間もなく、矢出川の細石刃石核とはまったく異質な舟底形石核と、特徴的な影器を保持する細石器文化の存在が明らかになった。新潟県荒屋の細石器文化である。かってその荒屋の発見者である星野芳朗さんが、荒屋の石器をかかえて私(由井)を訪ねてきてくれた。私は、芹沢さん達から聞かされていた石器を眼の前にして、矢出川の石器との相違点などを星野さんと話し合ったりなどもした。

それからどれぐらい時を経たかは覚えていないが、矢出川を渡った南側(矢出川第IV地点遺跡)で、暗青灰色のチャートのコアを発見した(第1図1)また、夕立に洗われた矢出川第I地点遺跡の下り坂で乳白色のコアを発見した。

(第1図2)ともに、いわゆる半円錐形と言われる矢出川の細石刃石核とは異なり、その特異さが私の關心を呼び覚ました。

2 第1図1は、チャートの細石刃石核である。部厚い剝片を構成に用い、そのポジティグな主要剝離面を石核の打面として利用している(2)。石核の整形もこの2面からの剝離によるもので、対する下盤からの剝離は僅かに認められるにす

ぎない。これらの整形によって石核の形態は舟底形を呈している。フルーティングは石核の長軸上の一端(2)においてなされており、頭部調整も顕著である。打面は、ほぼ均等に傾く均等打面で、その片側には調整痕も認められるが、これはフルーティングに直接関連するものではないと思われる。打面角は77°を測る。側面及び下盤の一部には自然面が残る。

第1図2は、珪質度の低いチャートを用いたもので、細石刃石核の原形と考えられる。その素材となっているのは部厚い剝片で、ポジティグな主要剝離面がe面にうがえる。石核原形の整形は、細石刃剥離の際の打面ともなると思われるe面と、e面に対するd面よりなされ、角錐状に仕上げられている。e面は、前後左右ほぼ均等に傾き、e面で80°、d面で71°を測る。なお、e面・d面ではすでに細石刃剥離が行なわれ、現状は作業面再生のなされた状態であることも考えられる。

3 今回の2例のように、部厚い剝片を素材としその主要剝離面を加工作面として舟底形の細石刃石核原形を生み出す技法としては、ホロカ技法(安藤 1979)があげられよう。当然、本資料2例もこのホロカ技法の範疇で理解できるものと考えられる。

ところで、このホロカ技法によって生み出される細石刃石核には、北海道・東北を中心とし

て東日本に分布のみられる帆加型石核(鈴丸 1979)と、九州・宮崎県船野遺跡等に代表される西日本を中心とした船野型石核(横 1975)とがある。端的に言えば本2例は、南まわりの船野型の系統上に位置付けられるものである。その理由としては、本州における船野型石核はしばしば野岳・休場型石核(鈴木 1971)を伴うこと(本資料の場合も矢出川遺跡に多量にみられる野岳・休場型細石刃石核と共にすることと解釈できる)、本州中央における船野型石核は、その石材としてチャートを多用する傾

向にあり本資料も同様であること、南回りの船野型石核は北回りの帆加型石核に比べると入念な調整による端整な舟底形が作り出されず、本資料も端整なそれとはいえないことがあげられる。

さて、矢出川遺跡における細石刃石核2例は、このように船野型として認識できるものである。そしてその存在は、神奈川県上草津第1地点遺跡、同県下鶴間長押遺跡などとともに、本州における船野型石核の分布の南限にあたる北のものとして捉えられよう。

## 蓼科山北麓に於ける縄文中期初頭の穀相

福島 邦男

蓼科山北麓とは、北佐久郡の千曲川西方全体を指してもよいが、とりわけ、蓼科火山によって形成された雄大な裾げと、その間に流れる河川によって発達した狭長な谷平野と、さらに側牧原台地や八重原台地もその一角に含めることができる。

昭和50年頃から、蓼科山の麓の望月町に於て継続的に発掘調査が実施され、特に縄文時代早期から晩期初頭の一連の資料が把握されるに至っている。そこで、良好な資料が増加しつつある縄文中期初頭の九兵衛尾根I・II式及び摺糸式土器について若干ふれてみたい。

九兵衛尾根I式土器は、後沖遺跡第7号住居址出土資料に代表される。第2図1は埋藏部の土器で、頸部から口縁間にかけて受口のキヤリバー状を成し、口縁に併行して隆脣を貼り巡らすが無文である。2・3は深鉢形土器の口縁部

で、踏場式の影響を残す縫帯上の連続押引文や三角連続刻文が施文されている。しかし、4・5の頸下半には、半截竹管による区画文によりY字形の傾向が強くなり、縄文が多用されるなど九兵衛尾根式の要素もみられるものである。

九兵衛尾根II式土器は、後沖遺跡18号住居址出土(7~9)及び第25号土塗出土(6)竹之城原遺跡第23号土塗出土(10)資料に代表される。6は口縁部が波状で外反し、竪糸式の特徴を残し、九兵衛尾根I~II式にかかるものである。8は押裏加の小型土器で、口縁は半円の連続文でI式の特徴を残すが、頸部にはY字形が発達し、地文に単節斜縞を施文するなどII式の前半の特徴を示すものである。10は口縁に突起が付いて外反し、地文に単節斜縞文を施文した後、縫帶により三角区画文を描いている。その中に、滴巻を基調とする玉抱き三

又文が施文されている。

洛式土器は、後沖遺跡第21号住居址出土(11・12)、第78号土出土(14)を代表とする。11は小型深鉢形土器で、口縁部に角押文がみられる。12は口縁がラバ状に外反し、人面模の突起が4箇所に貼付されている。器面全体に輪積み整形痕が顯著である。14は大人一人が入る程の極めて大型の土器で、口縁直下と胴部に文様帶をもっており、胴部下半に輪積み整形痕がみられる。13は北陸系の上山田第Ⅱ様式に比定され、21住11・12と共に關係をもつて出土したものである。口縁部の

二段に及ぶ蓮華文と新潟式から系譜をもつ特有の区画文が秀微である。

ここに紹介した資料は、全体の中の僅かなものであるが、千曲川水系では、断片的では各所にみられるが、米落構成による追跡から出土した資料はことにしかない。これらの特徴は、東科山西南麓及び八ヶ岳南麓地域と直接的なつながりを示すものであり、全く同様の文化が本地に定着したとみてよい。なお背後なら、東科山を越えた地域であっても、同一の文化圏として把握してもよいと思われる。

## 縄文土器を作る

岩村田高校社会班 小山 栄次

近年、高校の文化班の活動は文化祭中心であり、またそれが終ってしまうと、活動はほとんどしないのが実情です。それは社会班でも同じことがいえ、班に対する班員の意気込みや、関心が、次第に薄れていく一方であり、今年で2年目の班長を務める自分としては、今年は例年とは違った、班員一人一人が興味をもってやっていけるような、活動をしていかなければならないと考えていました。

そのような時、ふと思いついたのが、「縄文式土器でも作ってみるか」という安易な考えでした。しかしこれは、充分に楽しめて、しかも土器の名稱や用途、構造などが自然に理解でき、これまであまり考古学に関心をもっていなかつた班員も、これはおもしろそうだと、新めて開

もってくれるのではないかと考えるようになりました。夏休みの実習と併行して、土器の製作を行なつていくことにしました。

まず粘土の選択。どうせ作るのならば、天然の粘土を使いたいと考え、佐久市前山より粘土を採取してきました。しかし、これには不純物が多く含まれているので、粘りがないためすぐにひび割れが生じてしまうので、仕方なく市販されている粘土を使うことにしました。

土器の作り方は、まず土台となる底部を、形がくずれないようにしっかりと作っておき、その上に粘土の輪を、いくつか重ねて繋ぎ合わせ、大体の形を造り、そこから時間かけて整形していく、最後に縄などで模様をつけ仕上げる。まあ実際は文章で表現する程、うまくいくは

すがなく、最初は火培土器を作ろうと思っていましたが、すぐこわれてしまい、研究人は本当に盗用だったんだなあと感じました。

なんとか土器は出来上がり、それを3週間程度干しをした後、いよいよ焼成。早朝から昼まで、土器を焼くための窯をつくり、まず試験的に土器を数個入れてみる。するとたちまち土器は破裂してしまいました。これは急に高溫のところに入れてしまったためだとわかり、気を取り直し今度は、温度が約200°Cになったところで、土器を入れると前ののように破裂しなかったので、この調子で翌日の朝まで焼くことにしました。

翌日さっそく取り出みると、だいたい4割ちかく割れたり、ひびが入ったものの、なんとか焼き上げることができ、ほっとした。

粘土の採取から、土器の焼成まで失敗の連続でしたが、それによって古代の人々の知恵や、藝術的な才能を知ることができました。

今後の課題は

①天然の粘土を使って作る。

②土器が割れにくいように、砂や草などの根性質のものを混ぜてみる。

③完成した土器で、いろいろな実験をやってみる。

という事です。

## 野辺山の鉄鎌

土屋 忠芳

私の住む矢出原の地名は、徳川初期ごとに三軒茶屋が出来た時、すでにこの地名が使われており、記録としては、天文十一年村上義清の連合軍と武田信玄が平沢にて戦ったと記されている。激戦の跡と思われ鉄鎌が沢山落ちていたのがこの名の由来だと思います。

ここで発見されて、現在収録されている鉄鎌は、99、刀6、古鎌70、不明6であります。

鉄鎌の最大のものは、雁又で巾14cm、重さ50gあり、尖頭形54、雁又40で地図は海ノ口の市場から平沢神社にまで及んでいます。何といっても私の住居の付近に集中しています。

恐らく、丸山城は平沢陣が最も激戦地であったと思われます。

もし、最初から考古学の採集の様に注意深く見て記録して採集されたなら、当時の戦場の模様をいささか知る事が出来、また現在に数倍する資料が遺されたであります。

野辺山の鉄鎌は、矢出川遺跡と共に多くを踏む非常に興味深いものであります。

以上の数据は、保存処理を施した後、学校、個人宅等に保管されています。採集場所、所蔵者、資料の尖頭形、写真等の詳細は、雑誌『佐久』46号、昭和56年6月に記載してあります。ど一読下さい。

事務局からのお知らせ

- 佐久平の原始・古代学関係の文献情報をお寄せ下さい。

昭和59年に佐久考古学会員が執筆した報告書・雑誌等の文献、及び会員以外でも佐久平について取扱った文献を御存知の方は、事務局までお知らせ下さい。「佐久平古代史 文献解題」(仮称)を作成したいと考えています。

- 例会について <次回は、4月15日(土)に小山会員による「縄文の施文実習」の予定です>

弥生時代の基盤語座に、第3回59年9月8日に林会員による弥生後期、第4回10月15日に高村公貞による総括(1)「赤色塗彩土器文化層の提唱」、第5回昭和60年3月9日に田中会員による総括(2)「土器編年の再検討」が行われ、熱のこもった討論が交されました。また、59年10月2日には、林会員の記行にもあるように多賀城への研修旅行、60年1月15日には臨時総会及び新年会が佐久ホテルにて開催され、会費値上げと会則変更について話し合いました。

- 佐久考古通信版1~43号冊製本事業について

佐久考古学会発足15周年記念として行われている佐久考古通信の合冊製本事業は、3月9日の例会において作業をほぼ完了し、4月の刊行を待つばかりとなりました。例会の後は、埋文資料室2階にて、記念パーティが催され、15年間の想い出話に花を咲かせました。

- 新入会員

宮下健司、掛川祐司、三石宗一、佐々木春藏、吉沢義之衛、岩井裕太、浅沼 駿氏の7名が59年度に入会されました。今後とも大きな輪をつくっていきましょう。

- 通信版32号の訂正 5ページ後段下から6行目「小学生以下の」→「小学生以上の」

後記

本号は、日頃の研究成果を発表して頂こうと「資料紹介雑集」を企画しました。それに力作揃いですが、特に2年間に渡って岩高社会班の班長を務め、地道な研究活動を続いた小山栄二君の「縄文土器を作る」には拍手を送りたいと思います。

ピカピカの新しい季節が近づいています。  
本年度も皆で頑張りましょう。( T・K )

佐久考古通信版 33号

発行所: 佐久考古学会

長野県佐久市岩村田 1040-7

木内 捷方(〒385)

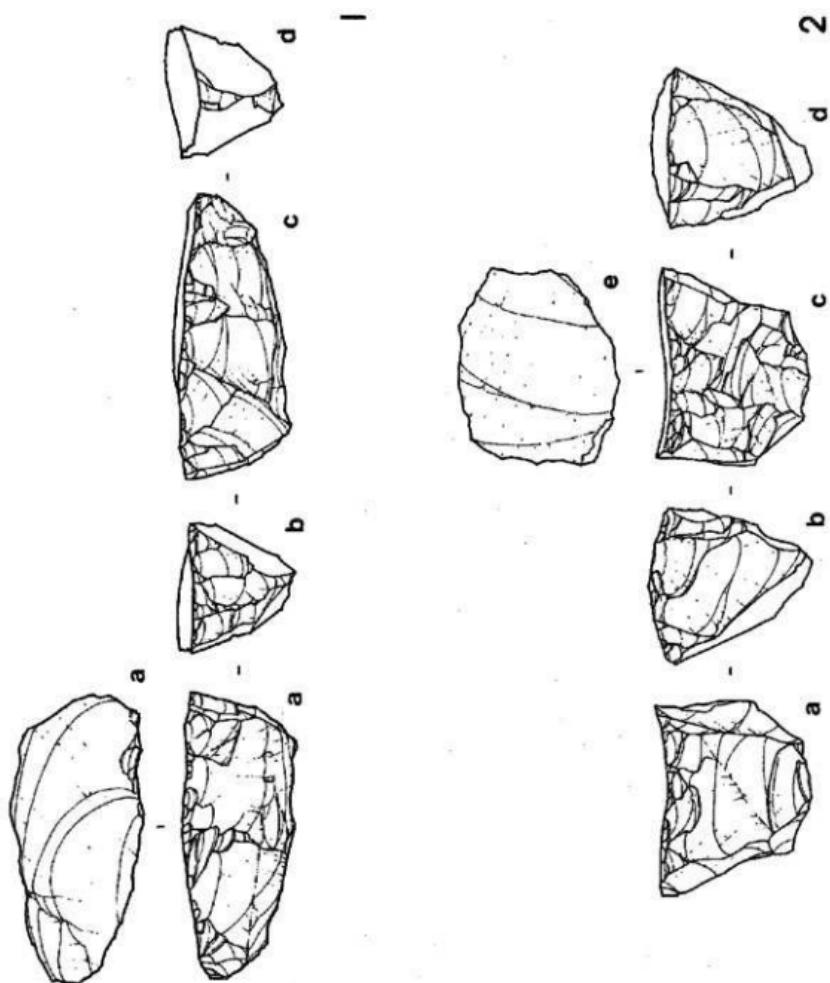
TEL 0267 68 0617

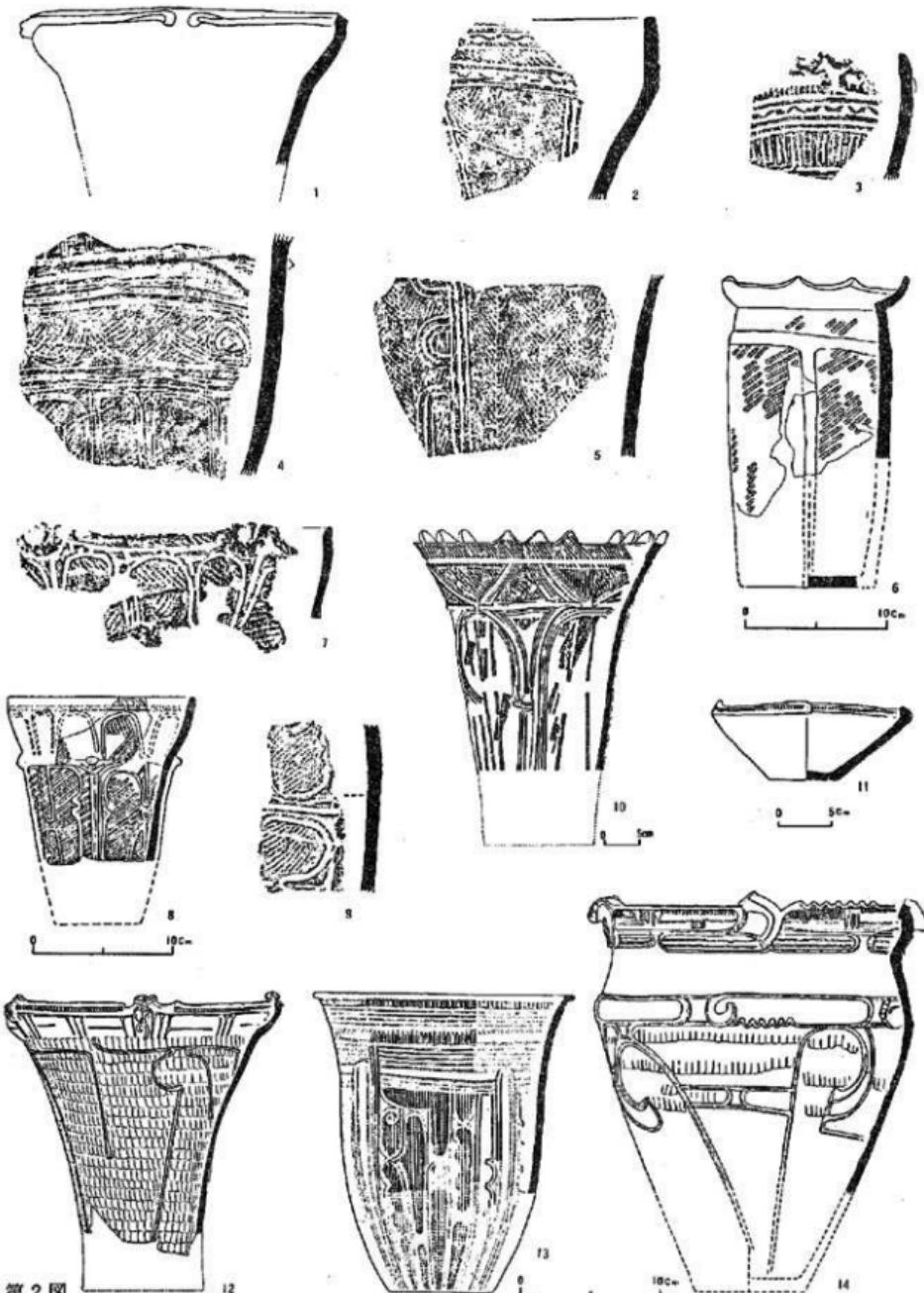
発行者: 由井 茂也

編集者: 井出正義(編集長) 高村 福島

森泉 小山 健

第1図 矢出川遺跡採集細石刃石核





第2図

後沖遺跡7住(1~5)、18住(7~9)、23土塙(6)、18住(7~9)、21住(11~13) 78土塙(14)、  
竹之城原遺跡23土塙(10)

# 佐久考古通信

第 34 号

1985, 5, 20

佐久考古学会

## 昭和 60 年度佐久考古学会総会次第

日時 昭和 60 年 5 月 26 日 ( 日 ) 午後 2 時 ~

場所 佐久市役所 8 階大会議室

1. 開会のことば
2. 会長あいさつ
3. 日程説明
4. 理長選出
5. 他

第 1 号議案 昭和 59 年度佐久考古学会会務・決算・会計監査報告及び承認の件

第 2 号議案 昭和 60 年度佐久考古学会事業計画承認の件

- 1) 一般事業計画
- 2) 特別企画「佐久考古学会 15 周年記念祝典」計画

3) 佐久考古学会シンボルマーク募集の件

第 3 号議案 昭和 60 年度佐久考古学会特別公費について

第 4 号議案 昭和 60 年度佐久考古学会会計予算承認の件

- 1) 一般会計
- 2) 佐久考古学会 15 周年記念祝典特別会計

## 6. その他の

\* 講演会 「野火付遺跡の歴史時代の様相」 講師 堀 雄（御代田町教委職員）

※ 講演会終了後、佐久市役所食堂にて懇親会（公費 1,500 円）を計画しています。お車での御参加は御遠慮下さい。

## 昭和59年度佐久考古学会会務報告

## 1 会務の経緯

昭和59年(1984)

|       |                                                                                                                                                    |                                                                     |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| 6月9日  | <総会>役員会並にて昭和59年度<br>総会を開催し、役員の改選を行う。<br><講演会>総会の後、岡谷市教育委<br>員会高林重水講師による「橋原遺<br>跡の調査報告—男生式土器を中心<br>として—」と題する講演を行う。<br><懇親会>講演会の後、佐久ホテル<br>にて懇交を深める。 | 直勤群保存対策小委員会を行う。<br>9月13日<総会>井出川遺跡長宅にて、佐<br>久考古通信No.32の総集会議を行う。      |
| 6月30日 | <事務局幹事会>埋文資料室にて幹<br>事の役割りを中心に話し合う。                                                                                                                 | 9月18日 川上村教育委員会にて三沢地区埋<br>文化財の件について話し合う。                             |
| 7月14日 | <例会>埋文資料室にて花岡会員に<br>よる男生基徳講座第1回「男生期<br>の土器について」を行う。                                                                                                | 10月2日 「みちのく多賀城を<br><研修旅行>訪ねて」の研修旅<br>行を行う。                          |
| 8月11日 | <例会>埋文資料室にて小山岳夫公<br>員による男生基徳講座第2回「男生中<br>期の土器について」を行なう。<br><保存運動>同、矢出川遺跡群保存<br>対策小委員会もあわせて行う。                                                      | 10月6日 <保存運動>文化庁調査技官の矢出<br>川遺跡群視察に備え、資料集の作<br>成作業を行う。                |
| 8月15日 | <通信>「佐久考古通信No.31」を発<br>行する。                                                                                                                        | 10月11日 文化庁調査技官が矢出<br><保存運動>川遺跡群を視察する。                               |
| 9月8日  | <役員会>埋文資料室にて、研修旅<br>行と佐久考古通信No.30までの合<br>計製本業務を中心に話し合う。<br><例会>役員会に引き続いで林久義<br>による男生基徳講座第3回「男生<br>後期の土器について」を行なう。                                  | 10月12日<br>10月13日<例会>埋文資料室にて高村会員に<br>よる男生基徳講座第4回「赤色繪<br>彩土器をめぐり」を行う。 |
| 9月12日 | <保存運動>黒岩氏宅にて、矢出川                                                                                                                                   | 10月22日 川上村教育委員会にて、三沢道路<br>関係について県文化課指導主事小<br>林洋氏を交じえて話し合う。          |
|       |                                                                                                                                                    | 10月27日 野辺山社会体育館にて展示会の準<br>備を行う。                                     |
|       |                                                                                                                                                    | 10月28日<展示会>「野辺山の自然と遺跡を<br>知ろう」展及び「野辺山高原の自<br>然と遺跡を考える集い」を行う。        |
|       |                                                                                                                                                    | 11月12日 佐久考古学会会員名簿を作成する。<br>会員数47名と1団体。                              |

|             |                                                                                                                                 |                                                                                                                                                                    |
|-------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 11月19日      | <事務局幹事会>佐久考古学会15周年記念事業である通信第1~30合冊製本の関係を話し合う。                                                                                   | 1月14日 川上村三沢遺跡群確認調査の結果式及び調査のため川上村教委に行<br>ったが、開発業者の都合により中                                                                                                            |
| 11月24日      | 戸倉町観光会館にて三県シ<例会>ンボシウムが開かれ、当公としては11月例会として                                                                                        | 1月15日 止となる。<br>2月 9日 <役員会>埋文資料室にて佐久市埋文化財保護行政の強化に関する講義及び陳情の件を中心に話し合                                                                                                 |
| 11月25日      | 取り組む。                                                                                                                           | う。                                                                                                                                                                 |
| 12月1日       | <通信>「佐久考古通信第32」を発行する。                                                                                                           | 2月23日 茅野市白田会員宅にて佐久考古学会15周年記念事業一通信第1~30合冊一のための印刷及びとじ                                                                                                                |
| 12月15日      | <役員会>埋文資料室にて佐久考古学会15周年記念事業(佐久考古通信第1~30合冊)の件と川上村三沢地区レジャーランド開発に伴う埋蔵文化財の調査についてを中心話し合い、臨時総会の日程を決定する。<br><忘年会>役員会の後、佐久市丸万食堂にて忘年会を行う。 | 2月24日 こみ作業を行う。<br>3月 9日 <例会>埋文資料室にて、15周年記念事業の通信第1~30合冊作業を行い、課題に引き渡すだけとなる。また佐久市埋文化財保護行政の強化に感する講義及び陳情の結果について報告があり、そのことを中心に話し合う。最後に白田会員による骨生基癡夢座第5回「赤い土器を追おうの総括口」を行う。 |
| 12月20日      | 川上村教育委員会にて三沢地区埋文化財の件につき話し合う。                                                                                                    | <懇親会>例会の後、その場にて懇親会を行い、親交を深める。                                                                                                                                      |
| 昭和60年(1985) |                                                                                                                                 | 4月13日 <例会>埋文資料室にて、佐久埋文化財調査センター設立についての報告等があり、その後、小山会員による「埋文の施文方法について」の学習会を行う。                                                                                       |
| 1月 5日       | 埋文資料室にて、川上村三沢遺跡群確認調査についての打ち合せを行ひ。                                                                                               | <新年会>例会の後、その場にて懇親会を行い、親交を深める。                                                                                                                                      |
| 1月10日       | <団体会議>井出謙長宅にて佐久考古通信第33の総会会議を行う。                                                                                                 |                                                                                                                                                                    |
| 1月13日       | <総会>佐久ホテルにて会費2000円から3,000円に底上げの件、会則改正の件を中心に臨時総会を行う。<br><新年会>総会の後、会場にて新年会を行う。                                                    |                                                                                                                                                                    |

4月22日<役員会>埋文資料室にて、昭和60年度佐久考古学会総会の日程等を決定し、川上村三沢遺跡群確認調査の件も話し合ひ。

## 2 会務別事業数

- (1)総会……2、(2)役員会……4、(3)例会……7
  - (4)連絡会……3(6.5.1~5.3)、(5)研修旅行……1  
(みちのくの多賀城を訪ねて)、(6)講演会……1
  - (7)保存運動……4(矢出川流域群関係)、(8)展
- 示会……1(野辺山高原の自然と遊歩を知ろう)  
(9)事務局幹事会及び編集会議……6、(10)懇親会(忘・新年会も含む)……6、(11)特別企画……1(佐久考古学会15周年記念事業—佐久考古消息本1~30合冊一)

## 昭和60年度佐久考古学会事業計画(案)

## 1. 事業別計画(予定)

| 項目    | 日 時               | 場 所      | 内 容                      | 回 数 |
|-------|-------------------|----------|--------------------------|-----|
| 総 会   | 5月26日(日)          | 佐久市役所    | 昭和60年度総会                 | 1   |
| 例 会   | 毎月第2土曜日<br>午後2時から | 佐久埋文センター | 「赤い土器を追おう」の編集会議を中心       |     |
|       | 6月 8日(土)          | 〃        |                          |     |
|       | 7月13日(土)          | 〃        |                          |     |
|       | 8月                | 〃        | お盆のため計画なし                |     |
|       | 9月                | 〃        | 研修旅行にふりかえ                |     |
|       | 10月               | 〃        | 専別企画「佐久考古学会15周年記念祝典にふりかえ |     |
|       | 11月 9日(土)         | 〃        |                          |     |
|       | 12月14日(土)         | 〃        | 忘年会もあわせて                 |     |
|       | 861年              |          |                          |     |
|       | 1月25日(土)          | 〃        | 新年会もあわせて                 |     |
|       | 2月 8日(土)          | 〃        |                          |     |
|       | 3月 8日(土)          | 〃        |                          |     |
|       | 4月12日(土)          | 〃        |                          |     |
|       | 5月                | 〃        | 総会準備のため計画なし              |     |
| 役 員 会 | 随 時               | —        | —                        |     |
| 通 告   | 5月20日             | —        | 6.3.4                    | 4   |
|       | 6月30日             | —        | 6.3.5                    |     |

|       |                      |       |                       |   |
|-------|----------------------|-------|-----------------------|---|
| 通 信   | 11月 1日<br>2月 1日      |       | 636<br>637            |   |
| 研修旅行  | 9月22日(日)<br>9月23日(月) | 千葉方面  | 芝山埴輪館<br>佐倉市国立歴史民俗博物館 | 1 |
| 講 演 会 | 5月26日(日)             | 佐久市役所 | 「対火付遺跡の歴史時代の様相」       | 1 |
| 保存運動  | 陸 瞠                  |       | 矢出川跡跡群に関する            |   |
| 会 議   | 陸 瞠                  |       | 事務局幹事会・編集会議等          |   |
| 特別企画  | 10月12日(土)            |       | 佐久考古学会15周年記念祝典        | 1 |
| 研究報告  | 佐久考古学会研究報告書第1集の発刊準備  |       |                       |   |

## 2. 年月日順事業予定

- 5月15日(水) 佐久考古通信第34の発行
- 5月26日(土) 佐久市役所にて総会・講演会
- 6月 8日(土) 佐久埋文センターにて例会
- 6月30日(日) 佐久考古通信第35の発行
- 7月13日(土) 佐久埋文センターにて例会
- 9月22日(日)  
9月23日(月) 千葉方面へ研修旅行  
祝日
- 10月12日(土) 特別企画「佐久考古学会15周年記念祝典」
- 11月 1日(金) 佐久考古通信第36の発行
- 11月 9日(土) 佐久埋文センターにて例会
- 12月14日(土) " " \*後忘年会
- 昭和61年(1986)
- 1月25日(土) 例会及び新年会
- 2月 1日(土) 佐久考古通信第37の発行
- 2月 8日(土) 佐久埋文センターにて例会
- 3月 8日(土) "
- 4月12日(土) "

\* 例会は、変更の時のみハガキにて連絡します。

## 特別企画「佐久考古学会 15 周年記念祝典」計画(案)

日時 昭和 60 年 10 月 12 日 午後 2 時 ~

## 3 実行委員会

場所 佐久市役所

委員長 由井茂也

1 名称「佐久の古代を語るつどい」

委員 員 木内 振、井出正義、白田式正

2 事業企画

林 幸彦、福島邦男、高村博文

第一部 祝典

島田恵子、花岡 弘、小山介夫

○これまでの歩み、○シンボルマーク

堤 隆、三石宗一、森泉かよ子

ークの発表等

## 4 会場

第二部 記念講演会 (講師 2 人を予定)

第一・第二部 佐久市役所 8 階大会議室

第三部 宴会

第三部

食堂

## 佐久考古学会シンボルマークの募集について(案)

- |       |                                                                           |                                     |
|-------|---------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 目的 | 佐久考古学会が 15 周年を迎える<br>年にふさわしいシンボルマークを<br>作り、学会の象徴として通信・会<br>誌等の刊行物に使用するため。 | 3. 賞 金 1 万円                         |
|       |                                                                           | 4. 審査委員会 役員会をもってする。                 |
|       |                                                                           | 5. 募集方法 佐久考古通信第 35 号より会<br>員より募集する。 |
2. 募集期間 6 月 30 ~ 8 月 15 日 (予定)

## —昭和 60 年度特別会費について(案)—

本年度に限り、特別企画「佐久考古学会 15 周年記念祝典」の事業費へ補助するため、本年の会  
費 3,000 円に 1,000 円加算し、4,000 円とする。

## 昭和 59 年度会計決算報告

収入の部

単位 円

| 項 目     |          | 本年度予算額  | 本年度決算額  | 比 較     | 説 明     |
|---------|----------|---------|---------|---------|---------|
| 1 錫 越 金 | 1) 錫 越 金 | 34.297  | 34.297  | 0       |         |
| 2 会 費   | 1) 会 費   | 60.000  | 134.000 | 74.000  | 46人他滞納分 |
| 3 委 託 料 | 1) 委 託 料 | 0       | 0       | 0       |         |
| 4 会報売上金 | 1) 会報売上金 | 0       | 0       | 0       |         |
| 5 寄 付 金 | 1) 捐 助 金 | 0       | 0       | 0       |         |
|         | 2) 寄 付 金 | 0       | 0       | 0       |         |
| 6 総 入   | 1) 総 入   | 57.03   | 960     | △ 474.5 |         |
| 合 計     |          | 100.000 | 169.257 | 69.257  |         |

支出の部

| 項 目       |            | 本年度予算額  | 本年度決算額  | 比 較      | 説 明    |
|-----------|------------|---------|---------|----------|--------|
| 1 報 酬     | 1) 謝 礼     | 20.000  | 10.000  | △ 10.000 | 謝師禮    |
|           | 1) 印 刷 費   | 20.000  | 32.770  | 12.770   | 通常3回他  |
| 2 需 要 費   | 2) 消耗品費    | 5.000   | 5.140   | 140      | ノート他   |
|           | 3) 食 料 費   | 10.000  | 35.830  | 25.830   | 会議施設   |
| 3 交 流 費   | 1) 通 信 費   | 20.000  | 21.180  | 1.180    | 郵送料他   |
| 4 事 務 局 費 | 1) 事 務 局 費 | 15.000  | 11.351  | △ 3.669  | 例会茶菓子他 |
| 5 貨 币 費   | 1) 貨 币 費   | 10.000  | 7.930   | △ 2.070  | お見舞、電報 |
| 6 予 備 費   | 1) 予 備 費   | 0       | 0       | 0        |        |
| 7 錫 越 金   | 1) 錫 越 金   | 0       | 45.076  | 45.076   |        |
| 合 計       |            | 100.000 | 169.257 | 69.257   |        |

以上の通り相違ないことを認めます

会計監査

井上行雄

由井 明

## 昭和 60 年度会計予算(案)

収入の部

単位円

| 項 目     |          | 本年度予算額  | 前年度予算額  | 比 較     | 説 明                                 |
|---------|----------|---------|---------|---------|-------------------------------------|
| 1 繰 越 金 | 1) 繰 越 金 | 45.076  | 34.297  | 10.779  |                                     |
| 2 公 費   | 1) 会 費   | 206.500 | 60.000  | 146.500 | 51人×3,000<br>1冊本 1,000<br>52人×1,000 |
| 3 書籍光上金 | 1) 書籍元上金 | 25.000  | 0       | 25.000  |                                     |
| 4 税 入   | 1) 税 入   | 3.424   | 5.703   | △ 2.279 |                                     |
| 合 計     |          | 280.000 | 100.000 | 180.000 |                                     |

支出の部

| 項 目       |           | 本年度予算額  | 前年度予算額  | 比 較     | 説 明    |
|-----------|-----------|---------|---------|---------|--------|
| 1 報 酬     | 1)謝 礼     | 5.000   | 20.000  | △15.000 | 謝師謝礼   |
| 2 需 要 費   | 1)印 刷 費   | 40.000  | 20.000  | 20.000  | 通帳4回他  |
|           | 2)消耗 品費   | 20.000  | 5.000   | 15.000  | 印鑑、封筒他 |
|           | 3)食 料 費   | 40.000  | 10.000  | 10.000  | 会議謝他   |
| 3 邮 情 費   | 1)通 信 費   | 30.000  | 20.000  | 10.000  | 郵送料他   |
| 4 事 務 局 費 | 1)事 務 局 費 | 25.000  | 15.000  | 5.000   | 例会諸雜費他 |
| 5 義 福 費   | 1)慶弔 費    | 10.000  | 10.000  | 0       |        |
| 6 繰 出 金   | 1) 繰 出 金  | 110.000 | 0       | 110.000 | 15周年へ  |
| 7 繰 越 金   | 1) 繰 越 金  | 0       | 0       | 0       |        |
| 合 計       |           | 280.000 | 100.000 | 180.000 |        |

昭和60年5月20日

佐久考古通信第34号

( 9 )

## 佐久考古学会15周年記念祝典特別会計(案)

## 1 収 入

| 項 目      | 予 算     | 説 明                        |
|----------|---------|----------------------------|
| 1. 会 費   | 250.000 | 2500円×100人=250.000         |
| 2. 繰 入 金 | 102.000 | 佐久考古学会60年度会計より継出金          |
| 3. 雜 入   | 148.000 | 200円×500=100.000(絵ハガキ) その他 |
| 合 計      | 500.000 |                            |

## 2 支 出

| 項 目     | 予 算      | 説 明                                         |
|---------|----------|---------------------------------------------|
| 1 報 酬   | 100.000  | 記念講演講師謝礼                                    |
| 2 貢 金   | 10.000   | シンボルマーク貢金                                   |
| 3 需要費   | 1) 印 刷 費 | 10.000 案内状印刷代等                              |
|         | 2) 消耗品費  | 10.000 封筒他                                  |
|         | 3) 食 料 費 | 220.000 宴会費 2000円×100人=200.000 その他 20.000   |
| 4 通 信 費 | 60.000   | 案内状他 60円×500人=30.000 電話他<br>40円×500人=20.000 |
| 5 紀念品費  | 80.000   | 記念絵ハガキ 40円×4枚×500部=80.000                   |
| 6 予 備 費 | 10.000   |                                             |
| 合 計     | 500.000  |                                             |

佐久考古通信第34号

発行所：佐久考古学会

長野県佐久市岩村田 1040-7

木内 捷方(〒385)

TEL 0267 68 0617

発行者：由井 茂也

編集者：井出正義(編集長) 高村・福島

森泉・小山・捷

# 佐久考古通鑑

16 35

1985, 10, 1

佐久考古学会

|                                 |    |
|---------------------------------|----|
| 昭和 59 年度発掘調査年報。昭和 60 年度発掘調査速報特集 |    |
| 昭和 60 年度総会報告 (白田武正)             | 1  |
| 昭和 59 年度発掘調査年報                  |    |
| 大井城 (黒岩城) 址の調査 (小山岳夫)           | 2  |
| 戸坂遺跡の第 2 次調査 (小山岳夫)             | 3  |
| 佐久市円正防遺跡 (島田恵子)                 | 4  |
| 蛇塚 B 遺跡群野馬久保遺跡 (林 幸彦)           | 4  |
| 佐久町後平遺跡 (島田恵子)                  | 5  |
| 雨堤遺跡 (井出正義)                     | 5  |
| 昭和 60 年度発掘調査速報                  |    |
| 青銅の鉗が出土した上直路遺跡 (林 幸彦)           | 6  |
| 北西久保遺跡第二次調査 (三石宗一)              | 7  |
| 川上村三沢遺跡 (島田恵子)                  | 7  |
| 鍛師屋遺跡群前田遺跡 (斐 隆)                | 8  |
| 後 記                             | 10 |
| 附 図                             |    |

昭和 60 年度 総会報告

正試用

昭和60年佐久考古学会総会は、5月26日(口)午後、佐久市役所で開催された。自衛探査中の由井会長に代って、黒岩副会長のあいさつの後、試験的に白田武正を選出し、審議を進行。第1号議案では、事務局より59年度会務・会計報告、由井明監査員からは監査報告があげられ、異議なく承認された。

事業計画に関する第2号議案は、例会、空久考古通信の発行、研修旅行、矢田川遺跡の保存運動等の一般事業計画とともに、特別企画として佐久考古学会15周年記念祝典の計画が提案され、審議の中で、記念品については佐久の原

始古代を象徴する出土品の絵はがきを発行すること、さらに学会のシンボルマークについては、会員以外にも広く一般から募集することが確認され、例年になく中身の濃い60年度事業計画が承認された。

続いて第3号議案は、特別企画の事業費へ補助すため今年度に限つて会費3000円暨4000円にいたい旨の説明があり、賛成を得た。

予算に関する第4号議案は、一般会計と記念祝典特別会計の予算案が提示され、万場一致で承認された。

総会を通して思うことは、佐久考古学会創立

15周年という記念すべき今年度の学会活動が順調に運営されるためには、会員ひとりひとりの自觉の上に立つた協力体制づくりが今こそ必要であり、目指されなければならないということである。

講事終了後の講演会では、御代田町教育委員会の堤隆氏を講師に「野火付造跡の歴史時代の様相と類して、發掘調査の成果から考察されることをスライドを使って具体的に説明していた。調査は今年度も継続されることになつており、古代御牧との関連も含めて、遺跡の性格はより一層鮮明になると期待される。

## 大井城（黒岩城）址の調査

小山岳夫

大井城址は佐久市岩村田に所在し、湯川の左岸、標高710m内外の切り立つ台地上に占地している。昭和59年度の小集落地区対策事業に際して県史跡指定が一部解除されることになり、昭和59年5月～昭和60年1月の長期間にわたつて緊急調査が実施された。

大井城址は倉庫～室町時代に存続したと文献に記されており、北から石並城、王城、黒岩城の三城からなつている。今回は、黒岩城の南端部約3500m<sup>2</sup>と台地下の水田が調査された。検出された遺構は以下のとおりである。

|      |    |    |
|------|----|----|
| 弥生時代 | 土塹 | 1基 |
|------|----|----|

|        |     |     |
|--------|-----|-----|
| 古墳時代後期 | 住居址 | 15軒 |
|--------|-----|-----|

|      |        |    |
|------|--------|----|
| 時期不明 | 掘立柱建物址 | 3棟 |
|------|--------|----|

|     |      |       |      |
|-----|------|-------|------|
| 水田址 | 中～近世 | 堅穴状遺構 | 54基  |
|     |      | 土塙    | 288基 |
|     |      | 溝状遺構  | 2基   |

中世と考えられる遺構では特に堅穴状遺構が注目される。台地上に広く分布しており、平面形態は方形か長方形を呈している。規模は一辺15m内外の小型のものから一辺4mを超える大型のものまで様々であるが、壁面頂から壁面底まで70～80%を測る例が多く、一概に深い掘り込みをもつ傾向にある。また、壁外に入口施設と考えられる張り出し部を有するものや、壁下に小規模な柱穴が複数個並列（一边に4～12箇）される例も數多くみられることから、

この遺跡が古墳時代であることが確定できる。鉢入陶器、圓底陶器のほか、鐵、青銅器類、石器、茶臼、埴造物が多量に出土しており、陶器器種の分析を行えば、今まで不明確であつた当地方の土器やかわらけの年代が明らかにできると思われる。

土器は28基検出され、鉢形器が方形を呈している。性格については不明な点が多いが、遺物と見えられるものもある。円形を呈する土器は、高台的要素が強く、配石されたものもみられる。出土遺物は遺物状況とほぼ同様であるが、人、動物が抽出される例も多くみられる。

古墳時代後期の住居址は、ほとんどが近接し

た時期に構築されたものと考えられ、当時の集落構造を考える上で好資料である。出土遺物も豊富で、特にH2号住居址(焼失住居址)からは、土器標範、杯、高杯、鏡、須恵器蓋、环等多量の完存品のセットが出土している。

最終的に窓穴状遺構の性格についてふれておきたい。中世の窓穴状遺構は、東日本各地の城跡・城郭に関する遺跡で数多くの出土例をみているが、その性格については、住居址、地下倉庫、廻狩意見が様々に分かれたり、明確な位置付けはなされていない。調査では今後この問題を遺物の分野から詳細に検討し、究明したいと考えている。それが不明の点の多い大井城址の城郭構造を明らかにする指路となるものではないだろうか。

## 戸坂遺跡の第2次調査

小山岳夫

佐久市新子田ICに所在する戸坂遺跡は、櫛文・弥生・古墳・奈良・平安の各時代にまたがる複合遺跡では最大級の遺跡として古くから知られてきた。昭和47年にはその一部が発掘され、平安時代を中心とした住居跡群とそれに伴なう多量の埋蔵土器が出土したこと記憶に新しい。今回、調査されたのは遺跡群中では南面側にあたる標高710m内の段階断面の部分である。検出された遺構は以下のとおりである。

| 住居址  | 縄文時代中期後半 | 2棟     |    |
|------|----------|--------|----|
|      | 平安時代     | 3棟     |    |
|      | 円形窓跡     | 弥生時代後期 | 1基 |
| 特殊遺跡 | "        | 1基     |    |

| 土塁 | 弥生時代後期 | 1基  |
|----|--------|-----|
|    | 時代不明   | 12基 |

この中で円形窓跡について説明しておきたい。円形窓跡は全体の約1/4が調査され、検出長395m、横巾144~276m、深さは1m内外を測る。縁の断面形状はくわいねV字状を呈している。また、周囲の内側から土塁が11基検出されているが住居址にみられない。

出土遺物はすべて弥生時代後期の土器で完存品が多く、ほとんどが積転した状態で出土しているが、逆と高杯を組み合せた蓋付堅口は正位の状態で検出された。内蓋は1点、小型器2点、無頭蓋1点、深杯1点、器7点、高杯2点

である。性格は決定しかねているが、現段であるとしても極めて特異な例と言えよう。

## 佐久市円正防遺跡

島田 康子

円正防遺跡群は、岩村田駅から南西に広がる遺跡群で、この内外海縦貫への西北端、清水田遺跡が昭和15年に調査されている。今回調査した区域は岩村田駅北側斜面地の沿線公司事務所施設地で破壊を余儀なくされた約400坪の範囲を11月25日～12月10日Cわたつて調査した。検出した遺構は、古墳時代後期住居址6棟、土塗7基、円形周溝墓1基、その他同構造

の可能性がある円形周溝墓を発見した。住居址1棟は、9m×8m、9m×5.0mを測り、丸太40本の大形住居址である。これ等の古墳時代・化粧土は円形周溝墓を切っており、周溝墓は古墳時代後期以前の所産であることが判明した。多量の埴輪瓦が出土した北西久保遺跡の円形周溝墓との関連を考えられ、古墳城壁跡の上に大きな示現が与えられた。

## 蛇塚B遺跡群野馬久保遺跡

林 康泰

今回の調査地点は、蛇塚B遺跡第1・2次調査が行なわれた原曾住居址と原道香坂・中込塚を挟んで対照している。(株)サンエス電子工場新築工事に伴う緊急考古学調査である。

最初の住居址が確認されたが、完全に全容を調査なし得たのはわずか2軒であつた。いずれも平安時代の住居址である。

1号住居はベッド状遺構が付設され、多量の土器が出土した。東西5.80m、南北5.90mの隅丸方形で主軸方向はS 82°Eを示す。焼失住居であり炭化材が住居西半分を中心に検出された。カマドは、南詰からわずか90cm離れた東壁に構築されていた。

ベッド状遺構は、北西コーナーから北壁に沿つて検出され、茶褐色土の上部に黄色炒質土が貼られていた。東西3.90m、南北1.50m、

長方形を呈し、床面から1.5mを測る。ベッド上の北西コーナーから、第一個の大形台付柱が正位で出土した。

出土遺物は、焼失住居といふとともに意外に多量であつた。土器類、鏡、金銀類等はほか大半を占める。持歸されるのは、第一個の大形台付柱で、口径2.3m、高台径1.5m、基高1.4mを測る。环部・台部ともにタコヨコナテ、片脇内面は口縁端部を除いて黒色研磨されている。他に鐵器土器、鐵製物類、刀子、銀製品、ひめグルミの種子などが出土した。

## 佐久町後平遺跡

島田恵子

後平遺跡は、佐久町大日向下川原に所在し、筑井川の左岸砂傾斜の台地上に位置している。遺跡の西端には館む大道駅跡が近接している。

本遺跡は、過剰開発による「農林省一村開拓整備バイロット事業」計画があり、破壊が予想されたため昭和59年10月5日～16日にかけて約4,000haの範囲に試掘調査を行った。

後平遺跡は、地元の高見沢今朝瑞氏から学時代（30年前）に発見した遺跡で、昭和53年に実施した佐久町遺跡詳細分布調査によつて新たに登録された。当初より、黒曜石。チャートを素材とした石器・石器類が多量採集されていったが、土器の採集は皆無であつたため、石器の形状から绳文早期であろうと予想はしていたが、正確な時期は不明であつた。しかし、今回の試掘調査によつて「田戸系の沈底土器」、「鶴が島系の条纹土器」および住居址とともにわれ

る遺構5、土坑3基が確認され、時期も決定的となつた。住居址の施設は4mを測るもののが2棟、3m50cmを測るもののが3棟で、土坑は1m～2m50cm前後を測る。この内、2基の土坑に掘り下を試みた結果、深さ50cm～80cmを測るかなりしつかりした土坑が発現した。覆土中からは、黒曜石の刷毛を中心とする土器も出土している。縄文時代早期の遺構は、堅穴住居址がほとんど確認されておらず、一時的なキャンプ地として理解されている。しかし、本遺跡は住居址的な遺構も確認されており、また県下でも既往例が少ないため本調査によつてその解明が期待される。トレンチによつての試掘で全体に及んでいないため、遺構はさらに倍増するものと思われるが、バイロット事業の予算が10年計画で補助されるため、本調査の計画も未定である。

## 雨堤遺跡

井出正義

所在地 小海町小海原雨堤

立地 千曲川と相木川に挟まれた標高1,100mの台地上にあり、西方千曲川の谷を隔てて松原原、八郎池原の台地と対面している。

周辺の遺跡 本遺跡に接続して南方山麓には、文政期の土器・石器を出土する。東方800mには、古墳時代から中世までわたる土器遺跡がある。

平安時代の鍔釜等を出土している。小海原は、戰後千曲川河から電力で揚水して開拓したが、その際雨堤地盤からは、石器・打石斧・土器等が出土し、「野」の磨き土器が発見されている。

発掘調査の経緯 1984年9月10日、地主 清金氏が耕作され、石（カマド）と土器を発見して小海町教育委員会に報告し、町教育

|                                                                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                                               |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 少興をしました。                                                                                                                                                                    | 石器 磐 烧、灰、系切底<br>灰點器、环口縁部小破片 2                                                                                                                                                                                 |
| 発掘調査期間 9月17日～26日の間で7日間<br>実施者 岩田、三谷、佐藤、白倉、沖原、井<br>出、外小長崎文化財調査委員会等                                                                                                           | 石器 磐石製凹盤形 1、中央に斜面一孔<br>鉄器 刀子 1、長さ 13 cm<br>炭化木、樹種未定                                                                                                                                                           |
| 検出された遺構                                                                                                                                                                     | 平安時代南佐久郡南部の 1.100 m の台地上に<br>居住していた人々の生活と文化を知る上に極め<br>て貴重な遺跡である。平安時代の高地農業の開<br>拓地における耕作跡について、南佐久郡が<br>は第二例目である。                                                                                               |
| 住居址 1、4.50 m × 4.70 m 圓丸・方形<br>柱穴 4 (1 は不正確) 周囲 西向陽<br>カマド、東窓中央 石組土台、支柱石あり<br>消失段落、床面北半部に炭化材 (梁)<br>ビント、西傾斜 8.0 × 4.0、深さ 2.0<br>川原石 1 25×1.0 床面中央寄りに据<br>えられ、そばに鉄製刀子が置かれていた | 平安時代南佐久郡南部の 1.100 m の台地上に<br>居住していた人々の生活と文化を知る上に極め<br>て貴重な遺跡である。平安時代の高地農業の開<br>拓地における耕作跡について、南佐久郡が<br>は第二例目である。                                                                                               |
| 遺物                                                                                                                                                                          | 土師器、瓦、灰、焼、内面墨色、系佩、高<br>台付、墨書き器 3 (文字不詳)、模様の<br>ついた土器 1 点。甲斐鐵不鏽器等多く、<br>赤褐色、板金で光沢あり、花卉放射状模<br>文あり                                                                                                              |
| 昭和 60 年度 発掘調査速報                                                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                                               |
| 青銅の劍が出土した上直路遺跡                                                                                                                                                              | 林 幸彦                                                                                                                                                                                                          |
| 佐久市岩村田の北山河岸段丘上面路 (かみす<br>じ) 遺跡は、佐久市役所グランドの北側で廣接<br>している。株式会社イケチの新店舗が建設さ<br>れることから急いで調査が昭和 60 年 5 月 21<br>日より 6 月 5 日まで行なわれた。                                                | 生時代後期の南北約 10m、東西 7m を測る大形<br>の住居が東邊中程に南北棟定 16m、東西 13m<br>の長方形を呈する土塹より検出された。当初は<br>何らかの意図で破壊されたものと考えたが、劍<br>の出土状況及び多くの人骨と想われる骨格の出<br>土により、經済された人骨が身につけていたも<br>の。一生が大きいと考えられる。鉄刀が刃根<br>をさわったと仮定すれば、東塹の 5 点の骨格にち |

つた左の骨は左腕の尺骨と桡骨にあたる。他に左上腕骨、頭蓋、手骨と考えられるものが検出されている。骨は径約 6cm、厚さ 1.5mm を測る。現在のところ該遺跡が製造品かは未明している。当時有機物の薪など、とても普通の人人が入手できるものではなく、この人物は特定の人と見えよう。この人骨と鍋の上部には、頭部

から脛部へかけて、高环・足・足・頭という順序で 4 個の土器が正面に置かれていた。また、骨の上下から多くの炭が出土しており、熱を受けた骨と合わせると推測できたり土壇内で火が想定される。他に盆・足・高环・环・手づくねなどが 33 個以上出土している。

## 北西久保遺跡第二次調査

### 三石 実一

北西久保遺跡は、学生社入佐久学園による短大遺跡に伴ない、昭和 57 年佐久市長選挙によつて行なわれた第一次調査のあとをうけ、昭和 60 年 5 月より佐久市文化財調査センターによつて合地の両面約 6.5 × 9.0m にわたり、第二次調査が行なわれてゐる。現在、フランクリン作業が終了し、先史時代性層址、周壁などが多く發見されている。

北西久保 3 号墳は、この合地の南斜面に位置し、標高 686.0m を示す。墳丘は、台地斜面を利用して構築されており、D トレンチより確認され先周溝から、埋納は直徑約 20m と推定される。石室の内部構造は、横穴式石室で、南北に開口

し、通道と南側壁面が失われて少し全体の形状は不明である。平面プランは、獣穴で全長 3.2m、奥壁高 1.1m を測る長方形で、やや膨張りがみられる。石室材は、白倉先生の御意示によると、奥壁に集塊岩、側壁に安山岩が使用されており棺床には千曲の阿蘇石がしきつめられている。

遺物は、金環 8、勾玉 3、切子玉 5、管玉 1 丸玉 2 3、ガラス小玉 9 4、直刀 2、刀子、銅製品、人骨、須恵器などがあり、他に昭和 64 年度の市改築による封土中に、金環・馬具などが出土している。その他、石室東側より平面プランが不詳明な集石を伴なう土坑が確認され、高台付近 2、灰陶輪花瓶が出土している。

## 川上村三沢遺跡

### 島田 恵子

三沢遺跡は、野辺山矢出川流域に接続した東方の山腹に位置し、豆高石（1.786）m 付近から流下してくる支流の浸透地点から西方の道 10 番地、標高 1.300 ~ 1.350m を測る处に遺跡が所在している。

発掘調査はゴルフ場建設に伴ない、川上村政委より委託をうけた佐久考古学会が主体となつて、5 月 8 日 ~ 7 月 30 日に亘つて調査を実施した。第 1、2 地区の 21 地点を行ない、第 1 地点は、横穴式石室（九兵衛形式）の遺跡、

が50m×30mの範囲にわたって調査した。それは、土・苔7基を中心とする5角形を呈した柱穴跡の50m×20mを測る立石、最大・頗る大的の礫と土器片、水晶、黒曜石、チャートの剥片、石器・石器等を散在させた祭壇の場が主な遺跡である。試掘の遺跡は堅穴住居址が残るためにその後の追跡に破壊され、その実跡は解明されていない。また、墓域の周辺一帯に試掘跡を入れたが住居址の存在は皆無であつた。環地帯として残る上方の林の中に集落が予想される。

第2区は先土器時代の遺跡で、縄文・百舌鳥文化および石器類が検出された。石器類の出土層位は、3層に分けられる森林原生土の最下部(地表下50cm)より4~5層のローム層(50cm)内に包含されている。茂昌系ナイフ形石器(南関東エイヌ2B期16,000~17,000年)を主体とし、石核・剥片等で石質の素材はバラエティに富み、チャート、黒曜石、貝殻、水晶、砂岩、シルト岩、板岩、硅酸岩、輝緑輝灰岩等でそれぞれの石質に分割されたブロックを呈した状態で出土した。特に水晶が多量であつ

たことは塩出地を有する川上村ならではの特徴といえよう。

また、縄文・百舌鳥文化はセットにて、ローム下50cmから検出された。直径15cmの範囲を円形約1m延長し、6箇所のブロックを形成している。各層11ブロック20~30個、配石は5~10個を含むセットを有しており、内部では燃焼の火炎を受けている状態は確認できなかつた。尚、後述下10cmまで石器が包含されていた。また、縄文・百舌鳥文化の存在した地表面は低く、当時の生活面である様相をよく示していた。全国的に有名な矢出川・柏原遺跡群は先秦の青銅器によりほとんど破壊され、失墾率は例も少ない。こうした現象の中で今回調査した三沢遺跡は森林地帯の中にもつて、人為的変化のほどなどなされていない地区で、遺構・遺物の保存状態は極めて良好であり、今後の研究開拓にかける貴重な資料となろう。

また、本調査のなされた一帯は3mの盛土がなされ保護される。

### 鉄師屋遺跡群前田遺跡

#### 提　　論

鉄師屋遺跡群前田遺跡は、佐久市西原郷新宿の東方に所在する。地図としては、側田門大学御代田と佐久市大学小丘井の双方にまたがっている。昨年には、本遺跡と隣接し、同一遺跡群の中では把握される、鉄師屋遺跡と薪火付遺跡が発見されている。

前田遺跡は、昭和16年半蔵小田井・横野地区

現在は楊生源流河床を以て調査されているもので、約2.2万平方メートルにおよぶ調査対象地区のうち約4万平方メートル程が選択して把握され、現9月の時点での調査を以て終了しようとしている。

現在までに検出されている代表的な遺物は、堅打式火葬骨灰15分瓶、漆瓦経判瓦約100

概 土塁 井戸址 海浜遺跡である。

住居址は、古墳時代中・後期に属するものも幾つかみられるが、それはほとんど奈良・平安時代の所産と考えられる。広範囲な面積となり、室町時代における町屋建築の具体像がより詳明にさかつくものと思われる。

獨立柱遺跡は、現遺跡では判別がかなされていないが、おおよそ二者に大別できるものと考えられる。まず一者は、奈良・平安時代の住居址跡に付随するもの、もう一者はそれ以降(中世)の形跡と考えられるものである。いずれにしても100棟という数の多さには圧倒さ

れる。あるいは、東山道沿いに存在した官公厅的な施設といつても可行も可能とであろうか。

さて、検出された遺物としては、一般的な生活用具(土器・石器)が主であるが、該遺跡長(鏡・鏡)や、武器類もみられた。また、管轄すべきは、2点の円筒瓦(平安時代)の出土と鏡片1点の検出で、地方有人の居住も想起された。室町時代の土塁跡は、佐久地方の当該部の研究に大きく寄与するものであろう。

### 事務局からのお知らせ

#### ○ 訃報

佐久考古学会の長老の1人で、長い間にわたって熱心に発掘調査活動を続けてこられた佐久市端村田の森泉定勝さんが、この7月22日に御逝去されました。享年79歳でした。森泉さんの永年にわたる研究活動と御努力に対しまして、深く感謝いたしますとともに、謹んで哀悼の意を表する次第です。

#### ○ 新入会員紹介

下記の3氏が当会に新しく入会されました。今後ともより一層研究活動の輪をひろげてゆきましょう。

※ 小林春子 〒384-03 白田町勝間 202-4 TEL (0267) 62-2141

※ 和久井義雄 〒385 佐久市新子田内池 1788-3 TEL (0267) 67-0163

※ 金成弘臣 〒384-01 佐久市中込石神653 TEL (0267) 62-3845(中込中学生)

#### ○ 新幹事紹介

高橋の三石英一会員が新しく幹事の1人として加わりました。スタッフがより強力になり頼もしいものです。

### 9 上巻への研究旅行室放き札面。

一上北風の旅館を求めて一去る9月22日・23日の二日間昭和6年度の研修旅行が実施されました。参加者は佐久考古学会员と佐久の発掘調査をおこないいただいている協力者の皆さん總勢26名でした。初日は、佐倉の国立歴史民俗博物館を見学の後、成田山新勝寺で有名な成田市に宿泊各自成田山参拝をさせました。二日目は、芝山町の芝山歴史博物館を見学し、そこに展示されている埴輪を出土した前方後円墳駿塚・姫塚を訪ねました。なお、研修が滞なく実施できたのは、現地での村山好文氏(日本考古学研究所)の名鑑内と、中澤源助先生の左全運転によるものです。

通信では、受取を改めて、上信への記行字を認取する予定です。

卷一百一十一

森泉定蔵さんが亡なられた。べらんめえの江戸ツケ気質の森泉さん、発掘現場ではよく叱咤されたものだ。平賀の伍賀山古墳の調査以来、古墳調査に魅了された森泉さん、古墳の精査といいえば迷い宮の中へヘクを動かす森泉さんの姿がうかんでくる。

亡なられる一寸前に入院先の浅間病院をお訪ねしたとき、窓下の北西久保造跡の古墳から金環や玉類が検出されたことをお話をすると、「オレもいま一説古墳を掘つてみてえな」とボソリと呟かれた。元気になつてまた一緒に調査しましよう別れたものの、それが最後の会話となつてしまつた。

文化財保護は現在、危機的な状況に置かれていますが、私たちは森泉さんの真直ぐな姿勢を忘れることなく研鑽してまいりたいと思います。安らかにお眠り下さい。(T.T)

卷之三十一

佐久考古通信第35号

· 發行所：佐久青苔學會

長野県佐久市営細1040~7

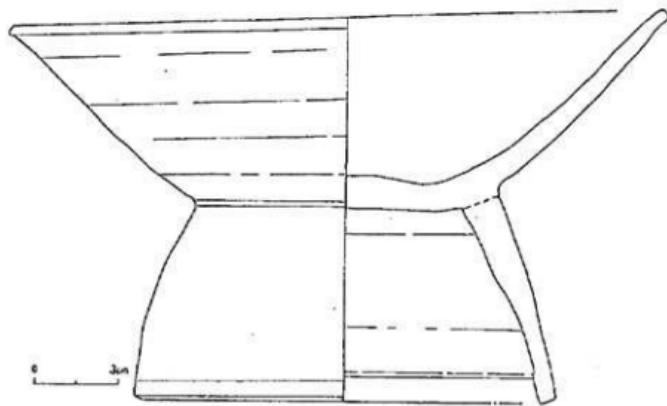
木构 钩方(平385)

TEL 0267 63 0617

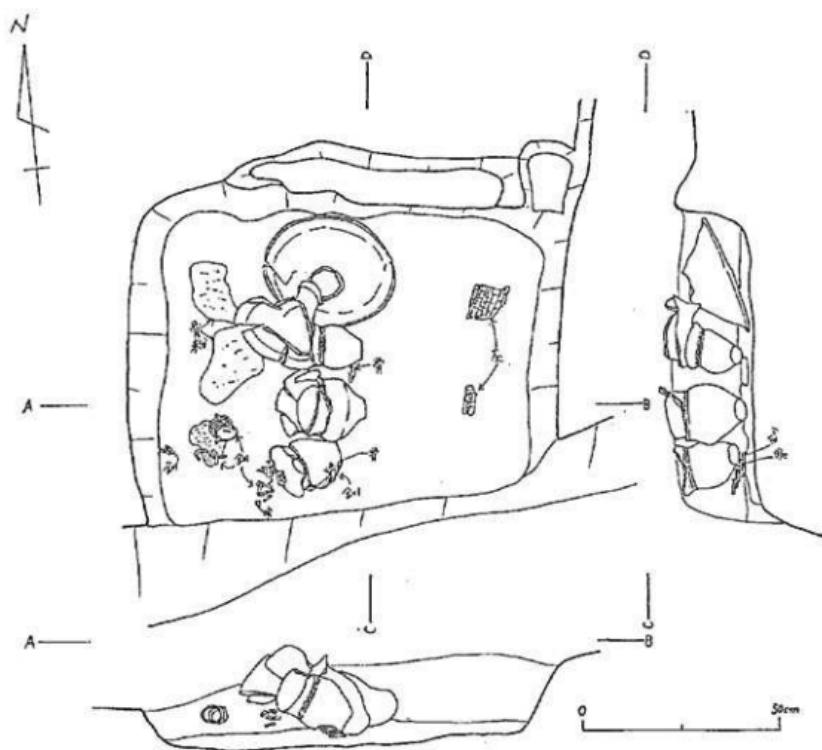
执行者：由桂 薛波

编著者：吉田正司（日文译者） 陈树 郭晓

西游 小说



第1図 蛇塚B遺跡群野馬久保遺跡I号住居跡出土遺物



第2図 麻糸坂遺跡群上直路遺跡I号住居跡土坑内遺物出土状態

# 佐久考古通信

第36号  
1986. 1. 1  
佐久考古学会

## 目 次

|                                                 |    |
|-------------------------------------------------|----|
| 新年の挨拶（由井茂也）                                     | 1  |
| 佐久考古学会15周年記念祝典盛大に行なわれる（木内捷）                     | 2  |
| 旅行記 上總国の埴輪を求めて（三石宗一）                            | 2  |
| 昭和60年度佐久埋蔵文化財調査センター発掘調査概要報告<br>（高村博文・三石宗一・小山岳夫） | 3  |
| 宮下健司会員藤森栄一賞受賞                                   | 11 |
| 事務局からのお知らせ                                      | 12 |
| 後 記                                             | 12 |

## 新 年 の 挨 捛

会長 由井茂也

新年おめでとうございます。去年は、二ヶ月ばかり休暇をとって、十ヶ月で一年間が終り皆さんに大へん御迷惑をかけました。

改めて一年を省みると、一九八五年は、佐久考古学会にとっては、忘れられない意義深い年でありました。

一年をくくる忘年会の席上で、各地域の皆さんからの活動報告が行なわれ、非常に興味深くおききました。

旧石器時代の故郷、川上村三沢遺跡で、旧石器に出会ったことは当然ですが、地元の考古学会で旧石器遺跡の発掘調査を担当したことは意

義深く大きな自信を持つことになったと思います。

佐久町に於ける绳文早期の落し穴遺構を初め、小海町、白田町、御代田町、小諸市、望月町等の各遺跡の調査研究と、各々の特徴ある報告、ほんとに楽しく教えられました。

特に佐久市に於いての廣汎な遺跡の調査では、弥生時代から、古墳時代へ、更に歴史時代へと佐久の歴史を一頁づつめくっていくような精緻な研究が進められようとしています。

こうした重要な責務を担うことに今更ながら大きな誇りと同時に責任を感じます。

また十月十二日には、佐久市役所を会場として、佐久考古学会創立十五周年記念祝典を行うことが出来ました。招待者、講師諸先生、会関係者多数の参列を得て盛大な式典が挙げられたことは大きな感激がありました。これらの学会活動は亦、会員以外から多くの方々の御指導御協力を受けての成果であってこの点も改めて御礼申上度いと思います。

更に今年は、予定されている事業、亦既に計画されている諸事業が山積待ち構えている上に、関越道上越線の着工も組込まれ、地元としての学会活動は一層重要性を加えてきます。懸案の矢出川遺跡の保存運動も新しい動きをしています。会員皆さんの一層の御協力を願いし、同時に御健勝を御祈り申し上げて、簡単ですが新年のご挨拶といたします。

### 佐久考古学会 15周年記念祝典盛大に行なわれる

#### 事務局長 木内 捷

佐久考古学会15周年記念祝典は、10月12日午後2時より佐久市役所にて開催された。

お忙しい中駆け付けて頂いた明治大学教授戸沢光則、諒訪考古学研究所宮坂光昭、県史刊行会石沢 浩、佐久史談会田都雄、佐久市志刊行会大井隆男、木内 寛、佐久市教育次長柳沢界一、開発公社局長花里禪の諸氏はじめ関係者118名が参加した。第1部は祝典で、祝辭を頂いた後、学会のこれまでの歩みがふりかえられ、また、今日の学会の基礎を築かれ今はなき先學にたいし黙説が挙げられた。

また、15周年記念事業の一環である企のシンボルマークが20点の応募の中から決り、後沼 駿氏に賞状と記念品が山井会長より渡された。詫はがきにもこのマークが掲げられている。

式典後、記念講演が行われた。佐久に関係の深いお二人である。まず、筑波大学教授岩崎卓也氏の講演を頂いた。汎日本的見地から、信州そして佐久の古墳・古墳時代を考える上で、有意義なものであった。続いて、千曲川古代文化研究所主幹森鶴 稔氏の講演が行われた。佐久考古学会の歩みを内からそして外から見られ、今後の学会活動の一つの指針を提示された。

講演終了後、一階食堂にて祝宴が開かれた。遠来の仲間も多く、学会の歩み、思い出、研究について等々、話に花が咲いた。さらに、会場を洞源湖觀山荘に移し、夜遅くまで話は尽きなかった。

最後に、祝典開催にあたりご協力を頂いた皆さんに厚くお礼申し上げる。

### 旅行記 上総国 の 埼 輪 を 求 め て

昭和60年9月22日早朝6時、定刻通りバス2台を連ねて佐久市役所を出発、途中、歯痛により、佐々木氏が参加できないことを伝えに来た奥さんの「美枝子さん」に見送られ、一路千葉県佐倉市をめざしてR141を南下する。中央高速道・首都高速・東関東自動車道と、ワゴン車のガス欠・パンクというハプニングにも負けず車は快適に走り抜け1時半無事、佐倉市国立歴史民俗博物館に到着、ここで昼食をとった後見学。第1展示室から第3展示室までは、原始・古代から近世までを時代順に、第4展示室には日本人の民俗世界に関するテーマを展示してある。館内の広さに驚きながら見学し、見終った後は全員疲労の色が隠せない様子である。午後5時頃、宿舎である梅屋旅館に到着、夜は村山氏も加わり、大宴会となる。その後も、外に出でて女の子を追いかける人、宴会の続きををする人、蒜をうつ人、早く寝る人、それぞれ成田での夜を楽しんだようである。

2日目は、早朝の成田山新勝寺を散策した後8時半宿舎を出発、村山氏の案内で今回の研修旅行の最大のテーマである、芝山町はにわ博物館と殿塚・姫塚古墳を見学する。殿塚古墳は長さ88m高さ10mで二重の堀をもち、姫塚古墳は長さ58m高さ6mで一重の堀をもつ6世紀築造の前方後円墳である。はにわ博物館は、仁王尊観音教寺が設立した私立博物館で、殿塚・姫塚古墳より出土した埴輪など300余体の形象埴輪が展示されている。もう一度ゆっくり見学したい所である。頭上を飛行機が飛び交い、成田空港を見学したいという声もあったが、時間の都合により、とり止めにし、村山氏の先導によって、成田I.Cより東関東自動車道にのり、市川・高井戸・須玉を通り、午後6時全員無事に佐久市役所に到着した。

最後に、2日間マイクロの運転をしていただいた中沢さん、御苦労様でした。そして村山さん、御結婚おめでとうございます。

## 昭和60年度佐久埋蔵文化財調査センター発掘調査概要報告

高村博文・三石宗一・小山岳夫

佐久埋蔵文化財調査センターが5月より発足してから遺跡の調査は、着手順に第2次北西久保遺跡・西裏遺跡群西裏・竹田峯遺跡・栗毛板遺跡群芝間遺跡・筒垣遺跡群池畠遺跡・猫久保遺跡群西御堂遺跡の6遺跡を実施しました。以下にその発掘調査の概要として成果を中心に報告したいと思います。

### 1) 第2次北西久保遺跡

○動機 学校法人佐久学園が行う短期大学建設に伴う調査

○所在地 佐久市岩村田字北西久保

○発掘調査期間 S60.5.16~12.13

○検出遺構

南部の南斜面 古墳1基(7世紀後半), 特殊

遺構1基(平成時代), 土坑1基

台地の平坦部 窓穴住居址68棟（弥生時代中期49棟、後期18棟、時期不明1棟）周溝10基、特殊遺構2基（古墳時代1基、江戸時代1基）、溝状遺構6基、土坑77基

東部の南斜面 積群6基、ピット列1基  
○成果について

今回の台地上南半部、東部南斜面の発掘調査と南部南斜面古墳址の確認調査によって、第1次調査とあわせ、北西久保遺跡の全容がほぼ明らかになってきた。一つの台地上が、そっくり調査された例は、県内では長野市樋口内城跡以来のこと、全国的にみても僅少な例であり、特に弥生時代中期～後期の集落址（ムラ）の全容と各時代の変遷関係を明らかにできる資料を得られたことは、学術的な意義が極めて多大なものと言える。

検出された遺構は、弥生時代では、窓穴住居址、古墳時代では、古墳址の周溝と考えられる遺構が主体を占め、第1次調査でみられた古墳時代中期（和泉期）及び平安時代の窓穴住居址（以下住居址とする）は、今回、全く検出されなかった。以下、遺構について時代別に概観してみたい。弥生時代中期後半の住居址は第1次で44棟、今回49棟、計93棟が検出されており、該期の住居址相互に2～3棟の重複を有するものもあり、出土遺物の整理検討により少なくとも2時期にわたる中期の集落址のあり方が相定できそうである。

弥生時代後期前半の住居址は、第1次で15棟、

今回18棟、計33棟が検出されている。

後期の住居址相互の重複関係は、第1次調査分で3例認められるが、全体に割合規則的な間隔で分布していることが看取され、ほぼ同一時期に形成された集落と予想されるが、今後の整理検討課題としておきたい。遺構内容の詳細については正式報告に譲るが伊址のあり方（特に位置関係）については、調査時において、時期的な差異がある程度判別できたので、ここで記しておきたい。

中期の住居址の場合、炉は住居址のほぼ中央に位置し、後期の住居址になると北側に移行し、北側の主柱穴間に位置するようになる。炉の形態は地床炉及び地床炉に炉縁石を1個有する例が圧倒的に多く、他に「L」状、「コ」状の字状、「口」の字状の石開炉や土器敷炉、また、天竜川水系の弥生時代住居址に特徴的に付設される埋甕炉等もみられる。時期別には、中期の炉は、地床炉と地床炉に炉縁石を1個有する例と埋甕炉であり、後期は石開い炉、土器敷炉、<sup>①</sup>埋甕炉、地床炉等、多様である。また、後期の住居址には窓炉が付設される例もみられる。この他にも、中期と後期の住居址には、形態、内部構造等、内容に相違する点が多くみられ、正式報告では、この変遷過程も明らかにしてゆきたい。

古墳の周溝と考えられる遺構は、第1次6基、今回10基、計16基が台地の全域にわたって分布する。このうち、第1次調査により、石室の残存する古墳址1基と、長野県では初めてといえる、形態、円筒の多数の埴輪が出土している周溝古墳址の存在から、古墳に伴う周溝と位置づけてほゞまちがいないと考える。周溝の台地上で

の分布は、東及び南側の台地縁辺に15基の周溝が南から北へ連なるように分布し眼下の水田地帯を望む。他の4基のうち、大型の周溝3基はほぼ等間隔に北東から南方へ伸びる台地の中央線の付近か西側に分布している。周溝の規模は溝幅を含めた直径が35mを越える大型のものから6mの小型のものまで様々であり、S-2、S-3、S-4のように周溝を共有する例もみられる。以上、北西久保の周溝群つまり古墳群は、独立した台地上にかなりの密度度をもって群集しており、その点で県内では稀有な例と言え、今後、同様な資料に当たり意義づけてゆきたい。また、これらの遺構の年代は、現在、埴輪、土器等から5~6世紀代であると推定されているが、出土遺物等を分析し、できれば築造の順序についても解明できればと考えている。

その他、溝状遺構、土坑については時期及び性格とも不明なものが多いが、弥生時代中期後半の墓址と考えられる土坑が数基認められ、不明な点が多い千曲川水系の弥生時代中期後半の墓制の良好な資料となるかもしれない。

江戸時代の遺構は、台地上の南東端、斜面になる縁辺付近から検出された特殊遺構がある。台地の斜面にかかる端部を弧状に掘り込んでつくられた平坦面に存在する3基の土坑からは、いずれも良好な形の人骨が各一体ずつ出土し、そのうち2体には、寛永通宝(1645年鋳造)がそなえられていた。中でも一体にそなえられていた寛永通宝は、毛髪(?)に6枚丁寧に包まれて腹部へそのやや下から出土し、これによって人骨に確定な年代が与えられることになり、既期の

葬法や仏教との係わり、民俗学的な研究にとっても良好な資料となるであろう。

南部の南斜面の調査においては、古墳の石室残存部が確認できた。残存していた石室は、南東に開口しており、奥壁下部、右側壁の下部、左側壁の窓孔を推測できる石列が検出できた。また千曲川の小円礫を利用した砾床が存在し、表道部付近は擾乱のため明らかでないが、玄室内全面に敷き詰められていたことが窺える。

さらに、石室の南東部付近から灰釉陶器輪花瓶の完形品等が出土した特殊遺構が検出された。性格は平安時代の土坑の可能性が強いと考えられる。

東部の南斜面の調査区は、第1次調査の台地上から連なる約30度の勾配をもつ急斜面とその基部である低面にあたる。この調査区の西隣は、昭和41・45年度に発掘調査が行われており、鎌倉時代と考えられる五輪塔、火葬墓等、中世の墓域に深く関連する遺構・遺物が検出された。このような状況から当初これらに連なる中世墓域の一端の検出が予想されたのであるが、実際に検出された遺構は、時期・性格の不明確な砾群が6基とピット列が1基で、既期の墓域に直接関連と考えられる遺構は発見できず、本調査区まで墓域が読かぬことが判明した。

斜面基部の西側に集中して検出された砾群は明確に時期決定できる遺物に欠けるが、検出層位から見て大きく三時期に分けることが可能である。斜面の基部は、地山まで3層からなる土が220cmの厚さで堆積し、それぞれに文化層を形成している。各層の時期については今後、出土遺物等を検討しなければ決定できないが、最上層にあたる第I層からは、近・現代と考えられる遺

物、及び台地上から、流れ落ちたと考えられる摩耗した弥生・古墳時代の土器等、第Ⅱ層からは平安時代、第Ⅲ層からは弥生時代の遺物が主体的に出土しており、それぞれの文化層の時期を考える上での有力な手掛りとなりそうである。このような推積の状況下で、礫群1は第Ⅰ層中、礫群2・3は、第Ⅱ層中、礫群6は第Ⅲ層中より検出されており、それぞれに形成された時期に相違のあることを示している。性格については、これらの礫群のあり方に規格性、配列性などが全く認められず、人為的なものか、自然營力によって形成されたものか、現状では判断できず、今後の課題としたい。

ピット列は、東西方向一列に6個検出された。獨立柱建物址等の柱穴列であることも想起されるが、同様のピット列が存在すると考えられる南側が傾斜地の下部であるため、確認ができず当ピット列の時期・性格も礫群と同様決定する根拠に乏しい。遺物としては、礫群3中より検出された平安時代と考えられる七輪器杯、全体層序第Ⅲ層中より検出された大型の打製石斧（弥生時代か？）が代表例としてあげられる。

今回、台地の裾部（斜面からその基部にあたる平坦面）の調査は、各文化層の時期決定ができるかねている現状であるが、台地上にくらべて、層位的に年代を把握する発掘調査がより可能であることが理解できた点で意義深い。また、今回の遺物の出土状況は從来、見すごされてきた低地部にも遺構が存在する可能性が強いことを示唆するものである。現在、関東の各地域では低地の発掘調査例が増加しており、多くの成果

をあげている。例えば、埼玉県では東日本で未発見であった弥生時代初頭（中期前半）竪穴住居址（集落址）が発見され、また、遺跡数が極端に少なかった縄文時代後期の遺構も、低地部からの発見が各地で相次いでいる。このように、従来、未発見の遺構が確認できる点に留まらず低地部の調査は、植物等有機物質の遺存体が豊富に検出される特性を有する。これは、当時の生活・環境等を知る手掛りとなる情報量が台地上に比べて圧倒的に多いことを示しており、原始・古代等の社会を復元することが考古学研究の主テーマである限り、これらの地域により注意を払ってゆくことが今後の大きな課題と考える。

以上から本遺跡の存在する北西久保台地（江戸時代に造られた常木用水に区切られて南方に突き出した台地部）の古代人の足跡を第1次調査結果も含めて概観すると、まず、この台地に最初に足を踏み入れ定住したのは、弥生時代中期後半と考えられる。この時代には、北側の一部を除き台地上の全域にわたって、広く住居址が存在し、各時代を通じて最も活発なムラが営まれていたものと想像できる。次の弥生時代後期前半は、南端部及び東半部付近に住居址の分布がなく、台地中央からやや西側に偏在し、集落址が縮少する傾向が看取される。続く後期後半及び古墳時代前期の住居址は台地の北東部に1棟ずつしか検出され

ておらず、この台地上に集落の空白期間を向える。古墳時代中期になると台地上北東部に偏在した住居址群（集落）が出現する。この集落は台地上の南西部の端に位置する当大地、最大の規模（径35mを超える）の大型古墳と同時期に營まれた可能性があり、今後の整理作業では、その対応関係をテーマに追求してゆきたい。

古墳時代後期になると、住居址は存在せず台地上のほぼ全域と南部斜面に、密集した古墳群が造営され、台地がそっくり墓域に転化したものと考える。古墳群の平面的分布から、築造の順序及びその被埋葬者を推測するに、今の段階で考えられることを列挙しておきたい。まず、大型の古墳3基は少なくとも北西久保・一本柳一帯を支配し得た首長級の人を埋葬したものと考えられ、台地南西部の端に最初に築かれ、順次、北方へ等間隔に築造された可能性が想像できる。そして、台地の東及び南側の台地縁辺に存在する15基の小型の古墳は、築造年代が後出する考え方と、一方、3基の大壇古墳の被葬者と同族関係にある人々の陪塚となる可能性も考えられる。今後の遺物整理作業において、特に注意してこの問題に当ってゆきたい。また、周溝のみの検出であったため、その墳丘及び埋葬施設の問題についてもあわせて検討してゆきたいが、周溝内覆土より出土している礫（葺石の可能性が考えられる）より、ある程度の墳丘の存在が予想される。

奈良・平安時代には、再び集落址として、それらえられる住居址群が北東部に点在するが、その範囲はかなり限られる。また、台地中央付近の大型の周溝内と、南部南斜面からは土坑墓の

可能性の強い遺構が検出されている。当時代から斜面及び台地縁辺地域には、次代の五輪塔出土にみられる中世に継続する墓域が出現しある。さらに、近世（江戸時代初期）においても、南部東斜面には、前述したような土坑墓が検出されており、墓域としての利用は継続している。

最後に、この調査が学問的水準をおとさず終了まで行えたのは、ひとえに精魂こめて作業にあたってくださった調査参加者の皆さんと始終変わることなく優しい御援助と御助力をして下さった、地元のみなさんのおかげです。文末ながら記して感謝し、心からお礼申し上げます。

注1. 長野県史刊行会、 笹沢浩氏の御教示による。

注2. 佐久市教育委員会林幸彦氏の所見による。尚、このまとめにおいて、林氏の示唆及び助言によることが多いので本文としては取り出さないことを記しておく。

注3. 前掲注1.

参考文献 林幸彦（昭61）「長野県北西久保遺跡」『弥生文化の研究』7卷-1『弥生集落一』雄山閣

佐久市教育委員会（昭60）『はにわ展-佐久市北西久保遺跡第1号古墳出土の埴輪を中心として-』

## 2) 西裏遺跡群・竹田峯遺跡

## ○動機

西裏 佐久市土木課が行う市道拡幅工事事業に伴う調査。

竹田峯 岸野同和対策集会所建設事業に伴う調査。

## ○所在地 佐久市根岸字西裏及び伴野字竹田峯

## ○発掘調査期間 西裏 S 60.7.10~8.29

竹田峯 S 60.8.27~10.4

## ○検出遺構

西裏 遺跡 壓穴住居址21棟（弥生時代中期～後期10棟、古墳時代前期～平安時代5棟）、特殊遺構1基（古墳時代中期）溝状遺構4基、土坑9基；ビット群1

竹田峯遺跡 壓穴住居址5棟（弥生時代中期3棟、後期2棟）、特殊遺構3基（弥生時代漆棺1基含む）、方形周溝1基（弥生時代？）、円形周溝2基（弥生時代？1基、古墳時代？1基）、溝状遺構3基、土坑17基（弥生時代～平安時代。）、ビット群。

## ○成果について

## 1) 西裏遺跡

今回、調査を実施した西裏遺跡は、遺跡の存在する台地に約6m幅のトレシチを南北に調査したことによく、遺跡の性格を知る上でたいへん貴重な成果が得られた。

検出された遺構は、弥生時代中期～後期の壓

穴住居址群が主体を占め、古墳時代前・中・奈良・平安時代の堅穴住居址（以下住居址とする）も検出された。このことから、本遺跡は、長期にわたる複合遺跡であり、その密度を推定するに、台地基部附近から標高6.64m附近までは、密度の濃い弥生時代中期～後期の大集落址が存在することが予想され、古墳時代中期（和泉期）の集落も台地の高台付近に、かなり存在するものと考えられる。

西裏遺跡の調査で特筆すべき遺構・遺物は、D・E区の境界付近から検出され、新聞にも報道された、完形土器5個体を出土したT1号特殊遺構とI区より検出されたM3号溝状遺構内のビットに正位で埋められた甕があげられる。今回は、道路の拡幅という限られた地区での発掘調査のため、これらの遺構の全容が把握できないという問題はあるものの、今後の整理作業を通して、できるだけその性格を明らかにしていきたいと考える。

## 2) 竹田峯遺跡

竹田峯遺跡の調査は、西裏遺跡と異なり、集会所建設予定敷地という条件から、広範囲の調査が行なわれたため、西裏遺跡群におけるこの地区的性格がほぼ、解明できるものと考える。以下、整理作業が終っていない現段階で、今後の報告書作成に向けて本遺跡の問題点、課題等を含めて、その成果を、概略的にまとめてみたい。

まず遺跡の性格として検出された住居址をみると5棟とも、弥生時代中期～後期のみであり、先

の西裏遺跡で検出されていた、古墳時代及び平安時代の住居址の存在はなく、弥生時代中期～後期においての、該期の住居址群の北方終焉部と言えそうである。

また、古墳～平安時代には、竪穴住居址を利用した一般的居住地空間としての利用は、なかったものと判断できる。

さらに、弥生時代後期と推測される、周溝及び弥生時代中期～後期の土坑の存在から、該期においては、むしろ墓域として利用されていた可能性も大きいと考えられる。

他に、第3号周溝の性格は、現在調査中の北西久保遺跡と同様古墳の周溝と想像されるが、今後の整理作業の課題としたい。

また、多数のピット群、ほぼ南北に検出された溝状遺構等、その時期、性格についても追求したい。

最後に、竹田峯遺跡で最も注目に値する遺構・遺物としては何といつても、第3号住居址西隅より検出された、弥生後期の壺棺であろう。

佐久地方の発掘調査で発見されている壺(甕)棺は、周防姫B、戸坂第3次、蟻塚遺跡の3遺跡5例であり、今回のように、胎児骨(羽マリアンナ医科大学森本教授の鑑定による)が検出されたのは、県内でも稀有な資料である。さらに管玉2点、ガラス小玉2点が伴出しており、当時の風俗、習慣等の研究においても、新たな問題を提起するものと言える。

### 3) 粟毛板遺跡群芝間遺跡

①動機 佐久市上木課が行う市道芝間線道路改

良事業に伴う調査。

②所在地 佐久市岩村田字芝間

③発掘調査期間 S 60.10.14～11.15

④検出遺構

住居址4棟(古墳時代後期1棟、平安時代3棟)、特殊遺構1基(平安時代?)、竪穴状遺構1基(中世)、溝状遺構4基、土坑5基、掘立柱建物址?1基

⑤成果について

今回、調査を実施した芝間遺跡は、道路の拡幅工事のため幅5mという限られた範囲での調査のため、検出された遺構において、その全容を把握することができないという問題はあるものの、現時点で考えられる成果を簡単にまとめてみたい。尚、詳細な検討は今後の整理報告書作成に際し行なってゆきたい。

検出された遺構は、古墳時代後期(鬼高峰期)～平安時代の竪穴住居址、中世と思われる竪穴状遺構等である。その分布は北区においては、平安時代の竪穴住居址<以下、住居址とする。>(2, 3, 4住)が3棟検出され、これらの住居址は、調査区の西側にのびている。このことから、調査区の北、西側に続く微高地には該期の集落の展開が予想される。南区においては、古墳時代鬼高峰期の住居址(1住)が一棟検出されたが、調査区の西、南端には、該期の土器が表出され、古墳時代の集落の存在が予想される。本調査で特筆すべき遺構、遺物は、第3号住居址のカマドとT a-1竪穴状遺構及び特殊遺構より出土した鉄製器があげられる。

第3号住居址より検出されたカマドの遺存状態

は、非常に良好で燃道・天井部の一部が欠損しているのみで、袖石、支脚石は、面取りされた安山岩、絆石が構築材として用いられており、ほぼ往時のまま残存している。さらに、支脚石が2個検出されているが、同様に支脚石が2個検出されている例としては、兵士山遺跡第1号住居址・鉢師窯遺跡第1号住居址等がみられる。

このように当カマドは、佐久地方より検出される平安時代のカマドの構造等を考究するうえで、良好な資料であるといえよう。

また、K区より検出されたTa-I堅穴状遺構は、出土したカワラケより平安時代以降の所産であると考えられる。從来、堅穴状遺構は、不明瞭であったが、大井城跡（黒岩城）、桜井石堂遺跡、御代田町野火付遺跡より、明確な堅穴状遺構が検出されている。本遺跡より検出された堅穴状遺構もその貴重な一例となるであろう。

本遺跡の南西約1.2kmの台地上に所在する大井城跡（黒岩城）は、昭和59年に佐久市教育委員会によって調査が行なわれ、14～16世紀の堅穴状遺構53基を中心として、多数の遺構群が検出されている。また、西方約700mに所在する六供後遺跡では、大井城跡に関すると思われる断面「U」字形の構が検出されている。この2遺跡と本遺跡より検出された堅穴状遺構との関連性も考慮すべきであろう。

さらに平安時代の所産と考えられるT1特殊遺構より出土した鉄製品は、筑波大学教授岩崎卓也氏に見えていただいたところ、ハサミとのこ

とである。このハサミが平安時代のものとする、佐久地方、最古のハサミと言えよう。

#### 4) 筒烟遺跡群池烟遺跡・猫久保遺跡群西御堂遺跡

・動機 佐久建設事務所が行う県道香坂中込線バイパス改良工事計画（高速道路関連工事専用道路）に伴なう調査

##### ・所在地

池烟遺跡 佐久市安原字筒烟  
西御堂遺跡 佐久市安原字猫久保・西御堂

・発掘調査期間 S 60.11.15～12.24

##### ・検出遺構

池烟遺跡 坚穴住居址2棟（弥生時代後期終末～古墳時代初頭2基）土坑1基（奈良時代？），溝状遺構2基

西御堂遺跡 土坑2基

##### ・成果について

今回、調査を実施した、池田・西御堂遺跡は道路の改良事業のため、幅約12mという範囲での調査であり、遺跡の存在する台地全体を把握することはできないが、現時点で考えられる成果を簡単にまとめてみたい。尚、詳細な検討は今後の整理報告書作成に際し行なって行きたい。

検出された遺構は、池烟遺跡において弥生時代終末から古墳時代初頭と思われる堅穴住居址（以下住居址とする）2棟、奈良時代から9世紀代と思われる土坑1基がある。

今回の調査は、筒烟遺跡群の存在する台地の南部中央付近に東西に横断するト

レンチを入れたことに等しく、以上の遺構検出状況から、確実に弥生時代後期から古墳時代初頭の聚落址の存在が明らかとなったことは大きな成果といえる。

調査区西側より検出された第1・2号住居址は、佐久地方で今まで不明瞭だった弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる住居址である。佐久市における古墳時代前期と考えられる住居址の検出例は、非常に少なく今井西原遺跡で1棟、北西久保遺跡で1棟の2例しか知られていない。当住居址2棟は、該期の住居址形態を知る上で良好な資料といえよう。

また、調査区東側より検出されたD1号土坑は、牛馬骨とともに出土した遺物より、奈良時代から9世紀代の所産であると考えられる。当土坑より出土した牛馬骨は、馬上顎骨3・下頸骨2・牛上顎骨・下頸骨・中足骨・距骨であり馬は臼歯の生え替りつつある2~3才馬、臼歯の磨耗が著しい15~16才の老駄馬など4~5頭、牛は1頭で6~7才の小型牛であると推定される。D1号土坑の歯骨は、御代田町野火付遺跡の土坑墓に伴って検出された平安時代の5頭の

埋葬馬と違い、頭部の部分がほとんどで、その出土状態から異色な感を受ける。今後の整理報告書作成においてその性格を特に注意して追求していきたい。

池畠遺跡の西方約300mの台地上に所在する西御堂遺跡においては、住居址等の遺構は検出されず、土坑が2基検出されたのみである。このうちD2号土坑は、底面・周囲に粘土が貼りめぐらされており、当初、何に使用されていたのか不明であったが、地元の人の話によると、戰前までこのような形の肥料がつくられていたということである。

最後に、無事完了まで発掘調査を遂行して下さった調査参加者の皆さんをはじめ、暖かい御援助、御助力をくださった地元の皆さんに心から感謝の意を表し記してお礼を申し上げます。

注1. 長野県史刊行会笹沢浩氏の所見による。

注2. 群馬県立前橋第2高等学校教諭宮崎重雄氏の鑑定による。

## 宮下健司氏藤森栄一賞授賞 //

宮下健司会員が、長野県考古学会秋季大会において、長崎元源氏とともに第10回藤森栄一賞を受賞された。本会では先に由井会長が受賞されており、本会関係者では2度目の受賞にあた

る。氏の研究は広い分野にわたっており、考古学のみならずその研究は民俗学にもおよんでおられる。宮下さんの受賞を皆でお祝いするとともに今後ますますのご活躍をお祈りしたい。

## 事務局からのお知らせ

## ・訃報

佐久考古学会の長年の会員であられた、御代田町栄町の大井豊さんが、昨年12月12日に御逝去されました。享年82歳でした。大井さんの永年にわたる学会活動と御努力に対しまして、深く感謝いたしますとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

## ・新入会員の紹介

下記の5氏が当会に新しく入会されました。今後ともより一層研究活動の輪をひろげてゆきましょう。

井出智秀 〒384-11 小油町川久保 田 (0267)  
62-3845  
池田勝吉郎 〒384-01 佐久市中込 田 (0267)  
62-4390  
羽毛田伸博 〒385 佐久市岩村田 田 (0267)  
729  
羽毛田卓也 〒385 佐久市根ヶ井 田 (0267)  
67-5491  
554-1

## (賛助会員)

島山俊彦 〒384-01 佐久市三塚 田 (0267)  
62-6670  
(0267)  
堀川公行 〒384-11 小油町溝原 田 92-3565

## ・絵はがきあります。

15周年記念事業として作成された絵はがきで、佐久地方の先土器時代からの代表的な資料が掲載されています。まだ、在庫がありますのでご希望の方は事務局まで。1部200円。

## 後記

通信第36号をお届けいたします。原稿をいただいた時は「からっちみ（から凍）」の頃でしたが、日差しも一段と春めいてきた今日此頃です。遅刊は、極に編集者によるもので深くお詫び申し上げます。さて、本号は15周年記念祝典の記事、旅行記に加え、埋文センターから発掘の概報をいただき、中身の濃いものになったと我田引水ながら密かに？自負いたしております。次回は、従来の資料紹介のほか、ミニ講座なども加え、より充実したものにして行きたいと考えています。ご期待くださいとともに、会員の皆さんからの投稿をお待ちしております。

(H.H.)

## 佐久考古通信No.36号

発行所：佐久考古学会

長野県佐久市岩村田 1040-7

木内 捷方 (〒385)

田 0267-68-0617

発行者：山井 茂也

編集者：井出正義（編集長） 高村 福島

森泉 三石 小山 堤 花岡

# 佐久考古通信

No. 37  
1986. 7. 1  
佐久考古学会

## 目 次

|                    |   |
|--------------------|---|
| 昭和61年度佐久考古学会総会次第   | 2 |
| 佐久考古学会会則改正報告       | 2 |
| 昭和60年度佐久考古学会会務報告   | 3 |
| 昭和61年度佐久考古学会事業計画   | 4 |
| 昭和60年度会計決算         | 5 |
| 佐久考古学会15周年記念式典会計報告 | 6 |
| 昭和61年度会計予算         | 6 |
| 新役員の紹介             | 7 |
| 長野県考古学会地区委員選出      | 7 |
| 事務局変更のお知らせ         | 7 |
| 研修旅行案内             | 8 |
| 編集後記               | 8 |



昭和61年度佐久考古学会総会(宮下健司氏による講演会)

## 昭和61年度佐久考古学会総会次第

1. 日 時 昭和61年5月25日(日) 午後2時
2. 場 所 佐久市役所6階会議室
3. 日 程
  - 1) 開会のことば
  - 2) 会長あいさつ
  - 3) 感謝状授与
  - 4) 日程説明
  - 5) 議長選出
  - 6) 議事
- 第1号議案 昭和60年度佐久考古学会会務・決算・会計監査報告及び承認の件
- 第2号議案 佐久考古学会会則改正の件
- 第3号議案 役員改選の件
- 第4号議案 昭和61年度佐久考古学会事業計画・会計予算承認の件
  - 7) 新旧役員あいさつ
  - 8) 県考古学会地区委員選出の件
  - 9) その他
- 10) 閉会のことば
4. 講演会 「縄文草創期をめぐって」  
講師 宮下健司先生(長野県史刊行会専門主事)
5. 懇親会及び旧事務局長懇勞会  
会場 レストラン「かしわ」

## 佐久考古学会会則改正報告

### 現 行

#### 第5条

##### 1. 会費

- ア 一般会員 1) 個人 年額 3,000円  
2) 団体 年額 3,000円

イ 賛助会員

3,000円

### 改 正

#### 第5条

##### 1. 会費

- ア 一般会員 1) 個人 年額 4,000円  
2) 団体 年額 4,000円

イ 賛助会員

4,000円

## 第 6 条

### 1 の ウ

事務局(若干名)

事務局長 1 名と幹事若干名で構成し、会務を執行する。

事務局長：事務局を代表し、会務の執行を統轄する。

事務局幹事：会計幹事、書記幹事等その他必要な幹事。

3. 会長、副会長、事務局幹事、委員、会計監査員の選出は総会においてするものとする。又、事務局幹事は総会または役員会の承認を得て、事務局長が任命するものとする。

## 第 6 条

### 1 の ウ

事務局幹事(若干名)

事務局幹事長 1 名と幹事若干名で構成し、会務を執行する。

事務局幹事長：事務局を代表し、会務の執行を統轄する。

事務局幹事：会計、書記等その他必要な会務を担当する。

3. 会長、副会長、事務局幹事、委員、会計監査員の選出は総会においてするものとする。又、事務局幹事長は、幹事会の互選により選出する。

## 昭和 60 年度佐久考古学会会務報告

### 1. 会務の経緯

昭和 60 年(1985)

5 月 26 日

＜総 会＞ 佐久市役所にて昭和 59 年度総会を開催し、役員の改選を行う。

＜講演会＞ 総会の後、御代田町教育委員会、堤隆講師による「野火付遺跡の歴史時代の様相」と題する講演を行う。

＜懇親会＞ 講演会の後、市役所食堂にて親交を深める。

7 月 5 日

＜15 周年記念祝典実行委員会＞ 埋文センターにて、祝典参加者、講演会講師、記念絵ハガキ等についての話し合いをおこなう。

7 月 13 日

＜例 会＞ 埋文センターにて、研修旅行の件、矢出川保存対策の件等についての話し

合いをおこなう。

7 月 26 日

＜実行委員会＞ 案内状の送付者名簿の作成、記念絵ハガキについてのことなどを話し合う。

8 月 24 日

＜矢出川小委員会＞ 矢出川湿原における動物園建設問題について話し合い、南牧村に対して抗議文、動物園へ要望書を送付することを決定する。

9 月 22 日～23 日

＜研修旅行＞ 「上総国の大輪を求めて」の研修旅行を行う。

10 月 6 日

＜役員会＞ 特に 15 周年記念祝典について話し合い、最後のつめを行う。

|                                                                                                                          |                                          |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------|
| 10月12日                                                                                                                   | <新規会> 中込「竜門」において新年会を行う。                  |
| <15周年記念祝典> 佐久市役所にて15周年記念祝典を盛大に行う。シンボルマークは、浅沼馨氏のものが選ばれ、祝典後に筑波大学教授岩崎卓也氏、千曲川古代文化研究所主幹森島稔氏らによる講演が行われた。又、講演終了後、一階食堂にて祝宴が開かれた。 |                                          |
| 11月9日                                                                                                                    |                                          |
| <例会>                                                                                                                     | <例会> 埋文センターにて、矢出川保存運動の現状についての報告等をうける。    |
| 12月14日                                                                                                                   |                                          |
| <矢出川小委員会> 野辺山の大規模土地改良問題等について話し合う。                                                                                        | <例会・臨時役員会> 埋文センターにて役員人事の件、総会の件等について話し合う。 |
| 昭和61年(1986)                                                                                                              |                                          |
| 1月1日 通信No.36 発行                                                                                                          | 4月12日                                    |
| 1月21日                                                                                                                    | <幹事会> 井出正義氏宅において、総会に向けての下準備を行う。          |
| <見学会> 長野市信濃美術館「敦煌展」の見学会を行う。                                                                                              | 4月25日                                    |
| 1月25日                                                                                                                    | <役員会> 埋文センターにて役員改選、総会準備等を行う。             |
| <例会>                                                                                                                     |                                          |

### 昭和61年度佐久考古学会事業計画

|                           |                                       |
|---------------------------|---------------------------------------|
| 1. 総会                     | ねる。                                   |
| 5月25日(日) 佐久市役所            | 2月14日(土) 埋文センター                       |
| 2. 例会                     | 3月14日(土) 埋文センター                       |
| 6月14日(土) 埋文センター           | 4月11日(土) 埋文センター                       |
| 7月12日(土) 埋文センター           | 5月                                    |
| 10月11日(土) 埋文センター          | 3. 役員会 隨時                             |
| 11月8日(土) 埋文センター           | 4. 通信 No.37~41                        |
| 12月13日(土) 埋文センター、忘年会も兼ねる。 | 5. 研修旅行 9月頃に北陸へ                       |
| 昭和62年                     | 6. 講演会 5月25日(日)                       |
| 1月24日(土) 埋文センター、新年会も兼ねる。  | 佐久市役所にて宮下健司氏による「縄文草創期をめぐって」と題する講演を行う。 |

7. 保存運動 矢出川遺跡群に関して  
 8. 会 嘉 事務局幹事会、編集会議等は  
     隨時行う。

9. 研究報告 佐久考古学会研究報告書第1  
     集発刊の準備

### 昭和60年度会計決算

#### 収入の部

単位 円

| 項目      |          | 本年度<br>決算額 | 本年度<br>決算額 | 比較       | 説明  |                  |
|---------|----------|------------|------------|----------|-----|------------------|
| 1 繰 越 金 | 1) 繰 越 金 | 45,076     | 45,076     | 0        |     |                  |
| 2 会 費   | 1) 会 費   | 206,500    | 189,000    | △ 17,500 | 45人 | 1人 団体<br>1人 賛助会員 |
| 3 書籍売上金 | 1) 書籍売上金 | 25,000     | 48,200     | 23,200   |     |                  |
| 4 雑 入   | 1) 雑 入   | 3,424      | 0          | △ 3,424  |     |                  |
| 合 計     |          | 280,000    | 282,276    | 2,276    |     |                  |

#### 支出の部

| 項目        |            | 本年度<br>予算額 | 本年度<br>決算額 | 比較       | 説明   |  |
|-----------|------------|------------|------------|----------|------|--|
| 1 報 酬     | 1) 謝 礼     | 5,000      | 5,000      | 0        |      |  |
| 2 需 用 費   | 1) 印 刷 費   | 40,000     | 41,840     | 1,840    | 通信3回 |  |
|           | 2) 消耗品費    | 20,000     | 11,750     | △ 8,250  |      |  |
|           | 3) 食 料 費   | 40,000     | 10,120     | △ 29,880 |      |  |
| 3 通 信 費   | 1) 通 信 費   | 30,000     | 16,205     | △ 13,795 |      |  |
| 4 事 務 局 費 | 1) 事 務 局 費 | 20,000     | 6,920      | △ 18,080 |      |  |
| 5 麗 弔 費   | 1) 麗 弔 費   | 10,000     | 9,000      | △ 1,000  |      |  |
| 6 繰 出 金   | 1) 繰 出 金   | 110,000    | 110,000    | 0        |      |  |
| 合 計       |            | 280,000    | 282,276    | 2,276    |      |  |

$$\begin{aligned}
 &\text{支出残高分} & 69,165 \\
 &+ \text{収入増額分} & 2,276 \\
 &\hline
 &\text{残 高} & 441
 \end{aligned}$$

残高 71,441 円は、昭和61年度予算へ繰越。

佐久考古学会 15 周年記念式典会計報告

| 收 入           |         |                   |         |
|---------------|---------|-------------------|---------|
| 項目            | 金額      | 項目                | 金額      |
| 縁 入(学会より)     | 110,000 | 印刷費(案内状、絵ハガキ)     | 198,382 |
| 縁 入(赤い土器)     | 100,000 | 通信費               | 17,000  |
| 祝宴、宿泊費        | 252,500 | 講師謝礼              | 100,000 |
| 祝 儀           | 108,000 | 賞 金               | 10,000  |
| 雜 入(書籍売上等)    | 95,720  | 祝宴、宿泊費            | 258,250 |
| 小 計 A         | 666,220 | 消耗品費              | 8,710   |
| A - B = 2,878 |         | 予備費(食料費等 タクシー、写真) | 71,000  |
|               |         | 小 計 B             | 663,342 |

昭和 61 年度会計予算

収入の部

| 項 目     |          | 本 年 度<br>予 算 額 | 前 年 度<br>予 算 額 | 比 較     | 説 明 |
|---------|----------|----------------|----------------|---------|-----|
| 1 縫 越 金 | 1) 縫 越 金 | 71,441         | 45,076         | 26,365  |     |
| 2 会 費   | 1) 会 費   | 200,000        | 206,500        | △ 6,500 | 50人 |
| 3 書籍売上金 | 1) 書籍売上金 | 20,000         | 25,000         | △ 5,000 |     |
| 4 雜 入   | 1) 雜 入   | 8,559          | 3,424          | 5,135   |     |
| 合 計     |          | 300,000        | 280,000        | 20,000  |     |

支出の部

| 項 目       |            | 本 年 度<br>予 算 額 | 前 年 度<br>予 算 額 | 比 較      | 説 明         |
|-----------|------------|----------------|----------------|----------|-------------|
| 1 報 請     | 1) 謝 礼     | 5,000          | 5,000          | 0        |             |
| 2 需 用 費   | 1) 印 刷 費   | 100,000        | 40,000         | 60,000   | 4回 1回25,000 |
|           | 2) 消耗品費    | 20,000         | 20,000         | 0        |             |
|           | 3) 食 料 費   | 0              | 40,000         | △ 40,000 |             |
| 3 通 信 費   | 1) 通 信 費   | 30,000         | 30,000         | 0        |             |
| 4 事 務 局 費 | 1) 事 務 局 費 | 50,000         | 25,000         | 25,000   | 食料費含む       |
| 5 廉 弓 費   | 1) 廉 弓 費   | 10,000         | 10,000         | 0        |             |
| 6 繰 出 金   | 1) 繰 出 金   | 85,000         | 110,000        | △ 25,000 | 赤い土器印刷費     |
| 合 計       |            | 300,000        | 280,000        | 20,000   |             |

## 新 役 員 の 紹 介

|       |                                 |                                    |
|-------|---------------------------------|------------------------------------|
| 会長    | 由井茂也                            | 地区委員                               |
| 副会長   | 黒岩忠男 白倉盛男                       | I 地区(經井沢、御代田、小諸)<br>荻原範仁、田中        |
| 事務局幹事 |                                 | II 地区(北御牧、浅科、立科、望月)<br>掛川喜四郎、倉見 渡  |
| 幹事長   | 井出正義                            | III 地区(佐久市)<br>井上行雄、大井今朝太、佐藤敏      |
| 書記    | 島田恵子、三石宗一                       | IV 地区(臼田、佐久町、八千穂、小海)<br>三石延雄、佐々木宗昭 |
| 会計    | 小山岳夫                            | V 地区(北相木、南相木、川上)<br>由井 明、土屋忠芳      |
| 通信    | 福島邦男、花岡 弘、堤 隆<br>羽毛田卓也          | VI 地区(佐久地域以外の地区)<br>森泉かよ子          |
| 研究誌   | 臼田武正、福島邦男、花岡 弘<br>林 幸彦、高村博文、堤 隆 |                                    |
| 企画    | 井出正義、林 幸彦、高村博文<br>三石宗一、羽毛田卓也    |                                    |
| 会計監査  | 井上行雄、由井 明                       |                                    |

### 長野県考古学会地区委員選出の件

- 研究委員として 三石宗一
- 埋文委員として 羽毛田 卓也

### 事務局変更のお知らせ

木内事務局長退任により、事務局の所在が新事務局幹事長 井出正義方に変更しましたのでお知らせします。

佐久考古学会事務局  
南佐久郡小海町東馬流 5047  
井出正義方  
TEL (0267) 92-3171

## 研修旅行案内 「越前国一乗谷」

最近、大井城跡・野火付遺跡・石堂遺跡・前田遺跡(第2次)・後平遺跡と佐久地方中世の発掘調査が相次いでいます。かつて佐久ではお目にかかるなかった遺構の検出や、青磁・白磁・常滑などの陶磁器類や多量の石臼の出土など初めての経験に途感うことが多いかと思います。そこで、本年は中世の代表的な遺跡である越前国一乗谷朝倉氏遺跡を訪れようと研修旅行を企画しました。会員の皆さん、ふるってご参加下さい。

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、越前国を支配した戦国大名朝倉氏の5代103年間におよぶ居城の跡として知られ、福井市街東南10kmの一乗谷にあります。谷の木戸の内部に浅倉義景館を中心とした多くの家臣の館や寺院・屋敷の跡が良く残っている。谷の東の一乗城

山には15個所の郭を中心とした山城が存在している。

昭和42年より発掘調査と環境整備事業が進められている。その結果、文献史料とも関連させつつ「戦国城下町」とも呼びうる近世城下町の先駆的形態を考古学的に実施しつつある。

— 考古学ジャーナルNo.182, 1980 より

- 日程 9月15日、16日
- 宿泊所 神明旅館(福井市)
- 見学場所 一乗谷朝倉氏遺跡を中心として
- 出欠の有無は、通信着後直ちに連絡して下さい。
- 連絡先 佐久埋蔵文化財調査センター内  
三石・小山(0267-63-2394)  
佐久市埋蔵文化財資料室内  
林・羽毛田(0267-62-6121)

### ◀ 编集後記 ▶

予定より遅れましたが、佐久考古通信No.37をお届けいたします。今年は福島、花岡、堤羽毛田が担当することとなりました。よろしくお願ひいたします。現在各地で発掘調査が行われています。次号あたりから現場の進行状況等を報告していきたいと思います。

今回は先日開催された総会の報告を中心となりましたが、次回以降会員皆様の原稿等お待ちしていますので、事務局へお寄せ下さい。

### 佐久考古通信 No.37

発行所 佐久考古学会(軒局)  
南佐久郡小海町東馬流5047  
井出正義方  
TEL(0267) 92-3171

発行者 田井茂也

編集者 井出・福島・花岡・堤  
羽毛田

# 佐久考古通信

No.38・39 合併号  
1986. 12. 30  
佐久考古学会

## 目 次

|                        |         |
|------------------------|---------|
| 佐久市前田遺跡・鎧師屋遺跡第二次発掘調査速報 | 1       |
| 佐久市深堀遺跡群南鷹の宮遺跡の表探資料    | 羽毛田卓也 2 |
| 一乘谷 朝倉氏遺跡を尋ねて          | 佐々木宗昭 4 |
| 関越道の発掘調査始まる            | 白山 武正 6 |
| 須恵器研究会発足               | 8       |
| 新入会員紹介                 | 8       |
| 編集後記                   | 8       |

## 佐久市前田遺跡・鎧師屋遺跡第二次発掘調査速報

今年度4月より佐久市教育委員会が主体となり調査を進めていた両遺跡ですが、10月をもって終了しました。

### 鎧師屋遺跡

|                 |      |
|-----------------|------|
| 竪穴住居址(古墳～平安時代)  | 18軒  |
| 掘立柱建物址(古墳～平安時代) | 15軒  |
| 小竪穴状造構(中世)      | 6軒   |
| 土塙(中世)          | 138基 |
| 溝状造構(中世～近世)     | 15条  |

### 前田遺跡

|                  |           |
|------------------|-----------|
| 竪穴住居址(古墳～平安時代)   | 56軒       |
| 掘立柱建物址(古墳？～平安時代) | 38軒       |
| 小竪穴状造構(中世)       | 54軒       |
| 土塙(中世)           | 480基      |
| 火葬墓(1基)          | 石組土塙墓(2基) |

木棺土塙墓(1基)・土塙墓(1基)  
埋葬馬土塙(1基)を含む。  
井戸址(平安時代～中世) 4基  
等の遺構が検出された。

出土遺物は、古墳時代から平安時代の土師器・須恵器・鉄製品(鎌刀數点)と、中世の内耳土器・陶磁器・鉄製品・銅製品・北宋錢・石臼・擂鉢・石鍤・敲石・磨石・不明土製品・特殊石製品・馬骨・人骨・炭化米・炭化材など、ダンボールにして約120箱分です。

今回の調査では、当初の予想をはるかに上回る中世の土塙群・ピット群・小竪穴状造構が複雑に重なり切り合って検出された。中でも土塙群より検出された中世の火葬墓は、直徑50～80cmの石が四隅組まれ、焼土・炭化材・炭化

物・骨粉が60cm近く堆積していた。墓内からは、200以上の骨片と6枚の北宋銭が出土した。炭化材は5~10cm様の丸太で、意識的な配置が考えられる。なお石の表面はかなり焼け亀裂を生じていた。

最後に、調査終了まで作業に従事して下さった方々、及び御協力・御教示をいただいた諸氏・諸先生方に心より感謝の意を表しお礼申し上げます。

### 佐久市深堀遺跡群南鷺の宮遺跡の表採資料

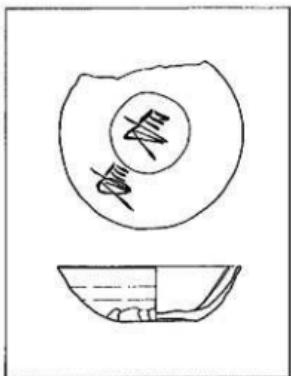
羽田 卓也



第1図 表採位置、周辺遺跡図

南鷺の宮遺跡は、弥生時代中期後半の遺跡として名高い深堀遺跡を含む深堀遺跡群の東側端に位置する。場所は、佐久市のほぼ中央、佐久

市役所の東800メートル、志賀川を見降ろす比高15メートルの台地東南端、標高689メートルに位置する。周囲には、和田上南遺跡(昭和54

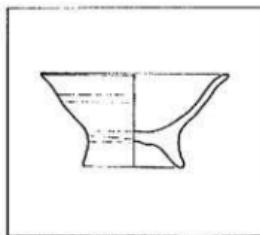


第2図 黒書土器(6)実測図(1:4)

年度一部発掘調査), 稲村遺跡(昭和57・58年度発掘調査), 尾敷古墳群, 中条峯古墳群, 寄山遺跡群(寄山古墳), 東久保古墳などが隣接する。

ここに紹介する遺物二点は、台地最東南端の断崖による数メートルの位置にあったと考えられる住居址より表探した。本住居址は、宅地造成のための重機による破壊を受けており、床と思われる部分が露出していた。坏(墨書き土器)は東側のピット状の落ち込み、高台付坏は中央の床面に散乱していた。なお、造成地内で本住居址の他、二棟の住居址プランを辛うじて確認することができた。

坏は、回転糸切りの平底から内擭気味に立ち上がり、口縁でやや外反する器形を有している。外面は、ロクロ横ナデで底部周辺にヘラ削りが施されている。内面は黒色研磨で、十字に暗文



第3図 高台付坏実測図(1:4)

が施されている。墨書きは、底部と体部の二ヶ所に「長」と書かれている。墨書きの残り状況は良好で細かい所まで明確に内観視できる。

高台付坏は、高台部がやや外反し、坏部で集約された後、直線的に立ち上がり、口縁で外反する器を有している。内外面とともにロクロ横ナデが施され、器形の三分の一が欠損している。

坏・高台付坏共に、表探後接合した資料で、割れ口が新しく、重機により破壊したと考えられる。

南鷺の宮遺跡の台地南端部は完全に消失し、一軒の家と二軒分の造成区画地となってしまった。この様に一度破壊を被った埋蔵文化財は、二度と元に戻す事はできず、遺物を事後に確認するのがやっとである。確かに佐久という所はどこを掘っても埋蔵文化財にぶつかる特殊な地域ではある。破壊を未然に防ぐ事は大変に困難ではある。工事現場で日を止めるのは私だけではないだろう。今回は何とも後味の悪い資料紹介となってしまったが、以上で終りたいと思う。

#### ●例会のお知らせ

今年度の例会を下記の内容中心に行う。

1月24日(土)弥生時代墓制について 高村博文

2月14日(土)弥生の金属器について 白田武正

3月14日(土)赤い土器の研究史 小山岳夫

4月11日(土)弥生住居の総合研究 林 幸彦

## 一乗谷 朝倉氏遺跡を尋ねて

佐々木 宗 昭

去る9月15・16日恒例の佐久考古学会の研修旅行が行なわれました。今年は福井県の一乗谷に所在する「朝倉氏遺跡」を研修する旅でした。

今回この遺跡を尋ねるべく計画をしたその背景には、近年佐久平においても大井城跡を始め小諸、御代田等の各地で中世の遺構が検出されつつあり、そこで是非、中世の遺跡を代表する朝倉氏遺跡を見学してみようと言うことになった訳です。

さて当日、いまにでも降りそうな雨雲を見上げ、AM 6:00 埋文資料室を出発する。

この雨雲を見ると、平素の行ないの悪い者が誰か居るに違いない…………。

小海を過ぎたあたりで早くもビール、酒、ウイスキーの栓が抜かれ、車中が賑い始める。

しかし、すでに最前部の席はことの外騒然としている。どうやら此の辺に、先きの空模様を占う人物が居そうである…………。やがて、車は野辺山へと差しかかり、某ドライブインにて○○○○タイムの予定、しかし、時間が早すぎ使用できない。よって一同、裏へ通り社供な気分となる。それにしても調査中に見慣れてはいるものの、朝霧の中でのその姿、格好は何とも言えず、ただ閉口のみ…………。まさに『十人十色』ならぬ、「じゅうにんといろ」である。

つまらぬ洒落はさておき、野辺山にて由井会長、由井 明さんが乗車し、今回の旅行者一行

20名が揃う。

今回の道順は、小淵沢インターより中央道に入り、米原を経由し北陸自動車道から福井へと向かう順であった。途中、井山先生はじめ各先生方より、歴史にその名を馳せた名勝、武将等のガイドがあり、その度に、車窓より広がる山河に、古代への通かかる思いを描き、そして又古代人らが旅の安全に幣を手向けたであろう峰の峰々を見晴らかし、車は順調に一路福井へと向かう。

東名高速を過ぎ、米原から北陸自動車道を走る頃より、雨雲が切れ、青空が広がり始める。

どうやら車中には雨男は居そうにもなく、いたって平素の行ないは良かったものと思われる。

やがて車窓の左側より、敦賀湾が見え、北陸路を走る実感と共に、目的地まであとわずかであることを知る。

PM 12:30 予定より約1時間30分早く一乗谷朝倉氏資料館に到着。ここで県教育委員会の仁科 章氏の案内のものと館内を巡る。さすがに北陸の「中世都市」と言われる遺跡からの出土遺物である。日常の食膳、調理具、そして又、日々の生活用具としては欠かせなかったであろう「石臼」、更には遊戯具の一つである将棋の駒(177枚、5セット分以上)などが出土している。他に、茶道や香道などもいとなまれていた様で、茶臼などの出土品もある。

此れ等の出土品を見ると、「戦国」という殺伐としたイメージからは、想像もつかない温和平で、穏やかな生活の楽が営まれていたようである。さて、此の資料館より、約数キロ離れた所に目的地である朝倉氏遺跡がある。此は言うまでもなく、戦国時代に越前国守であった朝倉氏の本拠地である。

昭和42年より発掘調査が行なわれ、今なお調査中の遺跡であり、特別史跡となっている。一乗谷川に沿って、帯状に細長く広がる狭い平地と、その両側にそびえる広大な山稜に展開する遺跡である。平地には幅4.5mの幹道がぬかれ、その両側に、居館、武家屋敷、寺院等が並ぶ町並であった。このことは発掘された土塁、礎石等からして瞭然たるものであり、私達はこの幹道を、まるで観光用に整備された遊歩道でも歩いているかの様な錯覚をもって見学している。

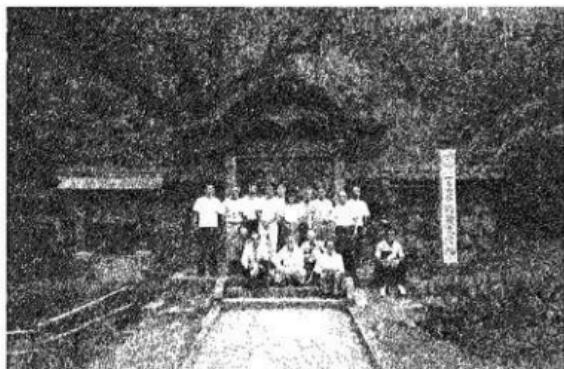
ましてや、その片側に配された溝などは、せせらぎの音が聞こえるかのようである。しかし、往時は此の道を商人が行き交い、そして又、武

士連が往還したであろう。そんなことをしばし忘れるほど、あまりにも当時のそのままの原形を残し、今日に発掘された遺跡である。又、庭園も大変興味深く、当時においては、屋敷の構成上欠くことのできなかったものであるらしい。

仁科氏の説明によると、本館庭園は完全に埋没していたが、流石組や、池底の敷石などが発掘され、豪快華麗な作風をおび、桃山調の庭園様式が感じられるとのことであった。

一方、これらの町並が遺在している狭い平地を三方から取り囲む形で形成される山稜には、山城、砦、櫓などが、自然地形を巧みに利用して築かれており、一乗谷朝倉氏の一大戦国城下町が形成されていたようである。

いずれにしても、想像していた以上に刺激度の多大な遺跡であり、山腹に配せられた「諏訪庭園」に向かう途中の高台より眼下に映る朝倉館の整然たる礎石と、その背後に迫る山稜にうっそうと茂る孟宗竹が、初秋の風に揺蕩くもなびくその様は、栄華を誇ったであろう往時を一層



惚ほせるかのようであった。

こうして強烈な印象を残しつつ、朝倉館の西門で記念写真を残し、次の目的地である永平寺へと向かい第1日目が無事終了した。

夜は仁科氏を交え、懇親会が開催され、その後、福井の夜を散策した人達もいたようであり、はたまた数人の人は、徹夜で〇〇〇〇に興じたようであった。

第2日目は、国定公園である越前海岸を通り、越前焼を見学して帰路につく予定であった。

晴れわたる越前岬を見ていると、昨夜の睡眠不足がたたっているのか、海中に敷い込まれそうな感じである。『白鳥や悲しからずや……』の詩がうかび、あの通き通る様な秋の日差と、

澄みきった空の青、海の藍さに全てが染まってしまいそうである……？

そんな越前海岸から車は、やがて離れ、岬へとさしかかる。そして、その岬を越した所に越前焼の産地がある。あいにく焼窯は閉ざされており、見学はできなかったが、展示会館において、各々お土産品を特選し、最後の研修地を後にした。

PM 6:30 一乗谷での大きな刺激と共に、あの永平寺での貴重な体験、「ミホトケノオミチビキ」により、無事、つつがなく今回の研修旅行が終了し、佐久に到着したことに感謝し、紀行文を〆たい。

## 関越道の発掘調査始まる

白田 武正

新聞報道等で既にご存知の方もいることと思いますが、いよいよ佐久市において、関越自動車道上越線建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査が実施される運びとなりました。調査は、日本道路公団の委託を受けた県教育委員会が御長野県埋蔵文化財センターに再委託して行うもので、10月1日に佐久調査事務所が開設され、6日に鍬入式が行われました。

今年度は、10月13日から12月26日までの期間を、用地買収が済んだ岩村田地区の佐久インター部分(仙探越東側)に所在する栗毛坂遺跡群(第1図)6,000m<sup>2</sup>を対象に、調査研究員5名、事務職員1名(いずれも松塙筑調査事務所から内部異動)、作業員55名の体制で実施します。

岩村田地区は、これまでに佐久市教育委員会によって行われた発掘調査結果が示すように、弥生時代から平安時代の集落遺跡が濃密に分布する地域で、最近では、中世以降の造構・遺物も多数発見されるようになってきました。

このような環境の中で行われる関越道の発掘調査は、単に記録保存を目的とした資料の蓄積ではなく、佐久地方の原始から中世に至る生きる歴史と文化の実態を、地元の人たちはもとより、広く一般に普及公開し継承していく使命の一端を担っているものと考えます。

今後、この発掘調査は、確認調査をして確定すべき部分も含め、香坂地区(トンネル坑口)から岩村田地区(インター)までの間に26遺跡約30

万m<sup>2</sup>が実施の予定となっています。

昭和67年度佐久インター開通目標に合わせ、発掘・整理・報告書刊行に至る一連の大事業を成し遂げるためには、内部努力はもちろんのこと、地元関係機関や関係団体との連携が不可欠で、とりわけ佐久考古学会ならびに会員の皆さんには、絶大なご支援をお願いしたいと思っています。

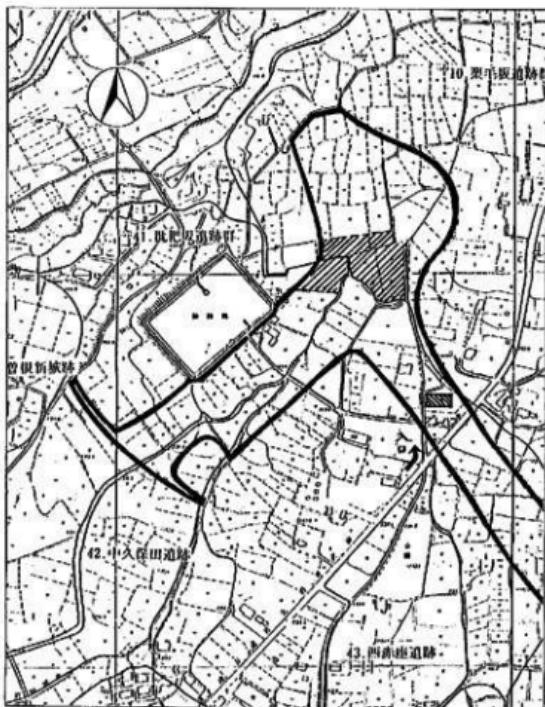
調査事務所は、当面、岩村田の佐久高校前にある長野県高速道事務所敷地内に開設されていますが、現在、新たに鼻顎稲荷の上に用地を確

保して正式な事務所を建設中ですので、いずれ移転する予定です。

なお、発掘現場近く(仙郷湖入口)にもプレハブの現場事務所を設置しましたので、お気軽にお立ち寄りの上、ご指導ご助言いただければ幸いです。

以上、調査を担当する者のひとりとして、会員の立場からの関越道に関わる発掘調査の概要説明とします。

(佐久調査事務所 TEL 08-4924)



第4図 発掘現場位置図

須恵器研究会発足！— 参加募集中

長野県考古学会の研究活動委員会では、須恵器研究を下記のとおり行うことになりました。佐久地方には、御牧原窯址群があり、また、集落址からも資料がたくさん出土しています。そこで、佐久地方においても地域の編年をまとめるため会員の積極的なご参加をお願いします。テーマ「信濃における余良・平安時代の須恵器研究」(7世紀(645年)以降)

来年の秋をめどに1冊の本とし、できればシンポジウムを開く。  
内 容 { 各論 各地域の須恵器の編年研究(窯址の報告を含む)  
| まとめ  
佐久平では、佐久市石附窯址、御牧原窯址群の資料を中心に集落址出土資料を加えていきたい。  
希望者は、事務局まで。  
問い合わせ先 福島邦男 (0267) 53-4150 花岡 弘 (0267) 23-5797

## 新入会員紹介⋯⋯よろしく！

篠原 浩江 〒384-22 北佐久郡立科町茂田井 1611-4 (電話) 0267-53-2433  
 田中正治郎 〒384 小諸市加曾 大日莊 (電話) 0267-23-7786  
 角張 淳一 〒384 小諸市甲 46-10 (電話) 0267-22-8495  
 田村 祐子 〒328 栃木県栃木市片柳町 1-6-14 片柳寮 (電話) 0268-23-1363  
24-9611

► 编集後記 ◄

通信No.38・39をお届けいたします。早目に原稿を頂いた方、遅れて申し訳ありません。

前号から紙面を一掃し、より見易いものになつたと考えております。

今年各地で行なわれた調査の概報は数回にわたり掲載の予定です。

なお、資料紹介等、原稿を募集しておりますので、お手元にて掲載下さい。(1)

佐久考古通信 No.38・39

発行所 佐久考古学会(転居)  
南佐久郡小海町東馬流 5047  
井出正義方  
TEL(0257) 92-3171

発行者 山井 茂也

編集者 井出・福島・花岡・堤  
潤毛田

# 佐久考古通信

No.40号  
1987. 3. 30  
佐久考古学会

## 目 次

|                             |       |   |
|-----------------------------|-------|---|
| 佐久町・後平遺跡                    | 島田 恵子 | 1 |
| 西片ヶ上遺跡とその周辺                 | 羽田野伸博 | 2 |
| 前田遺跡における八世紀代土器群の編年的予察       | 堤 隆   | 3 |
| 宿上屋敷遺跡                      | 三石 宗一 | 5 |
| 下川原・光明寺遺跡の調査—検出された中世遺構と安養寺— | 小山 岳夫 | 6 |
| 事務局からのお知らせ                  |       | 8 |
| 編集後記                        |       | 8 |

## 佐 久 町 ・ 後 平 遺 跡

島 田 恵 子

南佐久郡佐久町大日向に所在する後平遺跡は昭和59年試掘調査を行ない、翌60年第1次発掘調査、61年第2次調査を続行した。遺跡の紹介は『長野県埋蔵文化財ニュースNo.18』に記載されているため重複するので、今回は報告書作成終了後にあたり、その結果明らかになった成果について紹介したい。

先ず、縄文時代早期中葉～前期初頭にかけての遺構は、特殊遺構4基、落し穴22基、その他土塹80基、住居址3棟等が検出された。遺物の出土は、土器・石器等数量的に同比重であった。土器は破片がほとんどであったが、型式学的な面から、早期中葉～前期初頭における編年を組み立てることが可能となった。該期の土器は長野県下においては資料が少ないため、不明な点が多く判然としなかったが、最近、少量ではあ

るが新資料が増加したことによって、徐々に明らかになりつつある。後平遺跡の編年を軸に、今後ますます発展、修正していただけたらと願っている。

また、石器も形態分類を試み、生活の中でどのように使われたか等、勇を鼓したまとめを行なった。いずれにしても土器や石器は、人間が作ったものである。その用途を考えることがの

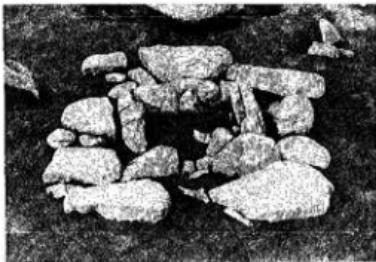


土 製 か ん ざ し

ぞかれ、形や調整の方法を論じた報告書がほとんどでは、片手落であるといえよう。

さらに、南佐久郡下では初見である縄文後期最末期の住居址1棟を検出した。写真に図示した土製かんざし、二重の石窓い炉等、やはり検出例の少ない該期の住居址は、今後の好資料となり得るであろう。土器は東北系の瘤付土器の影響もあるが、ローカル色が濃い。

また、今まで伝承の中には、棚六郎・矢田義清の牧場経営に関連する遺構の一部分が偶然に発見された。限られた地区内での調査であつたため、広大な牧のほんの一端では不充分な調



二重の石窓い炉

査とならざるを得なかったが、歴史的伝承を現地に確認したことは、なによりも大きな成果といえよう。

## 西片ヶ上遺跡とその周辺遺跡

羽毛田 伸 博

昭和61年11月に発掘調査を行った。西片ヶ上遺跡は佐久市香坂に位置し、標高842mを測る。

地形は北に阿伽流山山麓が連なり、その山脚上の緩い傾斜面上で、八風山や矢川峠及び寄石山に源を発する香坂川に流れこむ、浅い沢によって区切られた、北側の崖堆積地上に殆んどが立地しており、比高差は約10mを測る。

周囲には、曲尾Ⅰ遺跡(昭和61年9月崖堆積上と台地上の先端傾斜面発掘調査)、曲尾Ⅲ遺跡(昭和61年9月台地上先端発掘調査)、屋敷前遺跡(昭和61年10月崖堆積上発掘調査)、淡沢遺跡(昭和61年10月崖堆積上発掘調査)、茂内口・樽ヶ沢遺跡(昭和61年11月台地上発掘調査)、五斗代B遺跡(昭和55年度発掘調査)、兵士山遺跡(昭和54年度発掘調査)、これらの遺跡は部分的な発掘のため、遺跡の全容はつかめないが、崖堆積上で

は殆んど遺構がなく、平安時代の住居址が兵士山遺跡、曲尾Ⅲ遺跡から1棟づつ、茂内口遺跡から3棟検出され、香坂川北側に山地集落が上流に向かって点在していた可能性が強く感じられる。五斗代Bからは縄文早期～後期の遺物と平安時代の遺物が出土しており、遺構としては縄文時代の礎群が検出された。また、曲尾遺跡においては、縄文中期後葉～後期にかけての遺物が多く表揚されており、台地上においては中心部に泉の涌きでいる所があり、かなりの密度で縄文時代の遺構が存在すると考えられる。発掘調査の行なわれていない、仙太郎、木戸平A・B、鶴尾根、鶴尾根北、雨原A・B遺跡からも主に縄文時代の遺物が多く表揚されており、香坂一帯は市内の平坦地と異なった遺跡の様相を示している。

本遺跡の遺構は東側崖堆積上で土壙4基と

溝状造構が2条検出されたが、性格、所産期とも不明であった。西側崖堆積層のない緩い傾斜面上で住居址が1棟、土壙3基が検出されたが、土壙については性格、所産期は判明できなかった。

この住居址について概要を述べると、南方に張り出し部をもった柄鏡形敷石住居址であり、張り出し部と炉が略一直線上に位置しており、主軸方位はN-4°-Wを示す。主体部は東西425cm、南北420cmを測り、略円形を呈す。敷石は主に張り出し部側に三ヶ月型に敷きつめられており、他は炉周辺に散在していた。張り出し部は東西150cm、南北190cmを測り、隅丸長方形を呈し、雜ではあるが全面に敷石がなされていた。柱穴は円形礫中形式の様相を示しており、張り出し部と主体部の接合箇所は深く掘り窪められ、立脚した石によって仕切りされ、上に扁平な石が据えられていたが、中からは遺物が出土しなかった。炉においては4枚の扁平な石を4角に据え、中に土器を敷いた、石組埋焼炉であった。

これら敷石と炉に用いた石は、本遺跡においては容易に入手できる溶結凝灰岩と玄武岩であった。

遺物については、石組埋焼炉に用いた加曾利E系の系譜をひく深鉢、準三十幅葉式といえる憲形土器に近い深鉢と、他に称名寺式土器片が出土しており、これら系譜の異なる土器片が共存して出土していることは、交易・文化圏を知る上で貴重な資料であろう。その他石鏃2点、横刃型石器、凹石、打製石斧、敲石が出土しているが、総体的に遺物は少なく、祭祀的遺物も出土していないことから、敷石住居址の性格を把握するには資料不足であった。以上、これらの遺物から本遺構の所産期は縄文時代後期初頭と考えておきたい。尚、詳細については、報告書によって後述する。また、本調査が約10mという新設の道路幅の調査であったため1棟検出されたのみであったが、周囲の地形及び表探遺物から察し、他にも敷石住居址の存在する可能性が強い。

## 前田遺跡における八世紀代土器群の編年的予察

堤 隆

### 1 はじめに

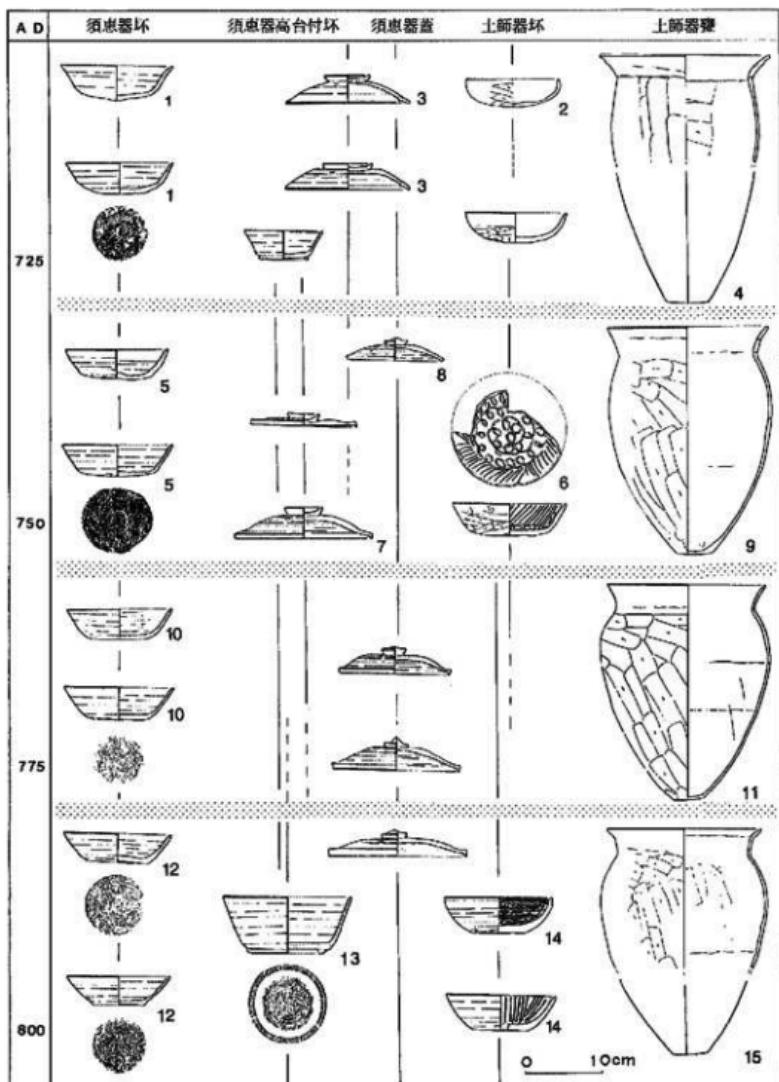
佐久市小出井・御代田町御代田にかかる鉛師屋遺跡群前田遺跡は、県営圃場整備事業実施に伴い昭和60年に佐久市教育委員会・御代田町教育委員会によって発掘調査がなされた。その結果、八世紀代を中心とする堅穴住居址130軒以上、掘立柱建物址110棟以上が検出され、当該期を語るうえで欠かせない集落遺跡となつた。引き続いて現在前田遺跡の遺物整理を進めてい

るが、その過程において八世紀代の土器様相がおよそ四半世紀単位で四段階に区分できることがしだいに明らかとなってきた。詳細はその発掘調査報告書に述べることとなるが、ここではその概要を紹介してみたい。

### 2 八世紀代の土器編年(第1図)

#### ◎ 八世紀第Ⅰ四半紀中心

底部が丸味を帯びた平底を呈し回転ヘラキリのまま未調整の須恵器(1)が土器組成の主体



第1図 前田遺跡における八世紀代の土器編年

を占める。土師器壊では、その当初には古墳時代後期の系譜をひく体部に僅かに稜をとどめる壊もみられ、また、九底・体部内湾の2も認められる。須恵器蓋では、かえりを有し皿状つまみの3もみられる。土師器長財甕は、後の時期に比べより器高が高く、最大径が口縁部にあり、外面胴部には一貫して縱方向のヘラケズリが認められるものもある(4)。

#### ◎ 八世紀第Ⅱ四半紀中心

土器組成の主体を占める須恵器壊は、回転ヘラキリの後全面手持ちヘラケズリの底部をみせるものが特徴的である(5)。土師器壊では、見込み部にラセン暗文、体部に放射状暗文の施される畿内系の盤状壊が殊にこの時期に特徴的に見出せる(6)。須恵器蓋では、佐波理境蓋の横放形態(7)や、宝珠つまみ・かえりなしの一般的な形態のもの(8)も見出せる。土師器甕の最大径は口縁部から胴部に移りつつあり、器高も前時期に比べると低くなる(9)。

#### ◎ 八世紀第Ⅲ四半紀中心

須恵器壊の底部切り離し手法に回転糸切りが採用されるが、その外周には手持ちヘラケズリがなされるのが特徴的である(10)。土師器甕は最大径が胴部上半にある肩の張る「く」の字状口縁のものである(11)。

#### ◎ 八世紀第Ⅳ四半紀中心

回転糸切りのまま未調査の底部をみせる須恵器壊がその組成の主体となる。その形態については回転糸切りにより壊の底部と体部の変換点が明瞭化する特徴も見出せる(12)。須恵器高台付壊では法量の大きい13が顕在化する。また、土師器壊では、ロクロ整形により内面黒色研磨のなされる14もみられるようになる。土師器甕は、「く」の字状口縁から「コ」の字状口縁への変化が認められ、器高も八世紀第Ⅰ四半紀のものと比べると低くなる。その底径も小さくなるようである(15)。

以上、きわめて大把みではあるが、前田遺跡の八世紀代土器群の編年についてふれてみた。

## 宿上屋

## 敷 遺 跡

### 三 石 宗 一

宿上屋敷遺跡は、佐久市安原地区、霞川右岸の標高700m内外の台地上に所在し、約700m西方には、昭和60年度に発掘調査が実施され、弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる住居址が2棟検出された筒烟遺跡群池烟遺跡が存在する。今回行われた調査は、佐久建設事務所が行う県道香坂中込線バイパス改良工事業(高速道路関連工事専用道路)に伴なう調査であり、遺跡の存在する台地の南端部について、幅約10m

と限られた範囲での調査である。

検出された遺構は、堅穴住居址6棟、特殊遺構3基、土坑9基であるが、調査区が幅約10mと限られており、さらに昭和47年度に行われた闇場整備事業の際に、埋土、農道の新設等が行われているため、6棟の住居址はいずれも全容を知り得ず、床面付近まで破壊を受けている状態であった。

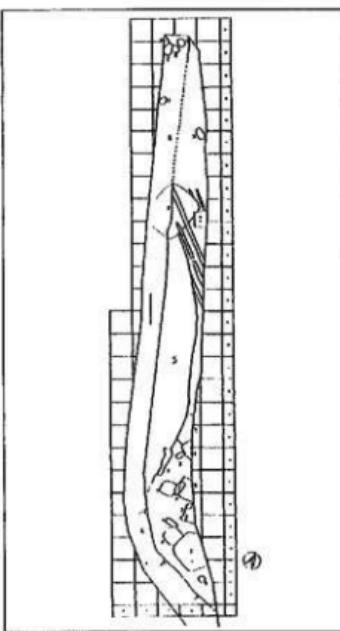
検出された6棟の住居址は次の5時期に分け

られる。

- 4世紀代(古墳時代前期) ..... H1・6  
7世紀代(古墳時代後期後半)? ..... H3  
8世紀末~9世紀前葉(平安時代前葉) ..... H2  
10世紀前半(平安時代中葉) ..... H4  
10世紀末~11世紀前半(平安時代中葉) ..... H5  
H1・6号住からは、赤塚次郎氏の分類によるC類に当るS字状口縁台付甕、小型高環、小型器台、小型台付甕などが出土しており、恒川編年Ⅷ期(布留古段階)に該当する。

平安時代の住居址にはH2・4・5号住がある。H2号住から土師器甕、須恵器环が出土しているのに対して、H4・5号住居址には須恵器环ではなく、代って虎渓山1号窯式、光ヶ丘1号窯式の灰陶器が出土している。

今回の調査では、台地の全容を把握するには至らなかったが、今後の調査によって、本遺跡に展開する集落の一端でも明らかにされることを期待したい。



第2図 宿上屋敷遺跡遺構配置図(1:1000)

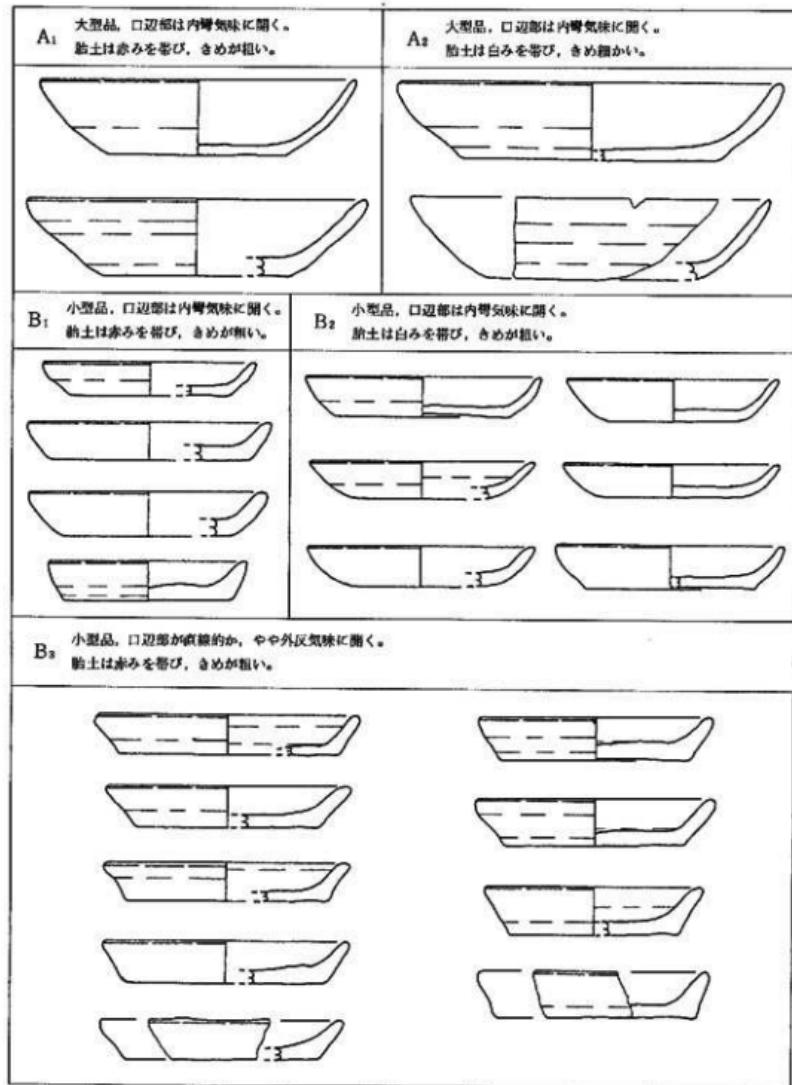
### 下川原・光明寺遺跡の調査 -検出された中世遺構と安養寺-

小山岳夫

下川原・光明寺遺跡は佐久盆地平坦部の最も東端、佐久市安原の標高710m内外の僅かな傾斜をもつ、小台上地上に位置している。遺跡南側には霞川が南流し、東側には平尾山塊が眼前に迫っている。遺跡周辺を取り巻く歴史環境は、安養寺・英多神社などの鎌倉・平安時代からの古い歴史をもつとされる寺社が近接する。

道路工事に伴う調査であるため、幅30m弱の小範囲の調査であったが、中世に比定される竪穴状遺構1基、溝状遺構2基が検出され、該期

における安原地域の歴史様相の一端が想定されるに至った。竪穴状遺構は一辺10m内外の規模をもつ大型の方形竪穴の建物址で、柱穴はもたず、礎石と考えられる偏平な大石が壁直下の床面上の各所に点在していたが、南北側は破壊が著しいため、総合的な配置は明らかでない。炉カマド等は検出されなかった。溝状遺構2基は竪穴状遺構北側に接し、いずれも直線的に調査区外まで伸びるため、全容は明らかでない。両者合せて方形区画を呈すると考えられ、未調査



第3図 下川原・光明寺遺跡土師質土器小皿分類図(1:2)

部分の溝区画内には生活址の存在も想定できる。また、東側の第1号溝は、両縁に人頭大の礫が整然と配されていた。以上の3基の遺構覆土はいずれも炭化材、炭化物を多量に含有することで共通しており、特に堅穴状遺構床面上には炭化物が厚い層を成して堆積していた。炭化物の分布は中世遺構内だけでなく、本遺跡遺構確認面でも一様に認められることから、中世において本遺跡一帯に相当規模の火災のあったことが想定できる。

出土遺物は土師質土器小皿(かわらけ)、中国磁器、国産陶器(常滑、珠洲、瀬戸・美濃系)、鉄製釘、炭化米などがみられる。土師質土器小皿が圧倒的に多く、693片出土しており、概して薄手で口径12cm内外の大形品(A)と口径8cm内外の小型品(B)に分けることができる(第3図参照)。本報告では在地の比較資料に恵れないため、時期の特定は行っていないが、陶磁器の年代や他地域の「かわらけ」の編年観から14世紀後半~15世紀代に位置づけられそうである。陶

器は出土量は少ないが、13世紀後半~15世紀の製品主体で、楕・皿等の供膳具や四耳壺・瓶等などの祭祇用具が主体を占め、擂鉢、捏鉢等の調理具は少ない。土器類全体をみると供膳具が主体を占めており、特に多量の土師質土器小皿の存在は往時的一般集落には見られない傾向であると言われ、本遺跡が特殊な性格を有すること、つまり寺社に関連する遺跡であることが想定できる。このことは中世において土師質土器小皿(かわらけ)が寺社においては祭事に多用され、その際には毎年大量の「かわらけ」が購入されていたという当時の記載からも裏付けられる。

これら今回の調査成果から、数次の火災によって移動が行われたと言われる安養寺は中世において本遺跡周辺に占地していた可能性が強いことが想起され、調査で検出された遺構は安養寺に関わる何らかの施設と考えることもできるのである。今後、この周辺の調査・研究に一層の期待が寄せられよう。

会費納入のお願い 昭和61年度の会費納入状況は3月現在で5割に達しておりません。円滑な学会活動を促進するためにも、会費未納の方は今すぐ会費の納入をお願いします。

(会計幹事)

#### ► 編集後記 ◀

本号は、昭和61年度に実施した発掘調査の報告とその成果を掲載しました。一連の調査の他に、関越自動車道の調査も開始され、佐久地方は発掘調査のピークを迎えていたといつても過言ではありません。これらの様子を今後とも通信によりつぶさにお伝えをしたいと思っています。ご期待を。

(福島)

#### 佐久考古通信 No. 40

発行所 佐久考古学会(軒局)  
南佐久郡小海町東馬流 5047  
井出正義方  
TEL(0267) 92-3171

発行者 由井茂也

編集者 井出・福島・花岡・堤  
羽田